
B L O O D L I N E T E M P E S T

Mr.J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L O O D L I N E T E M P E S T

【Nコード】

N 2 3 9 3 C

【作者名】

M r . J

【あらすじ】

どの国の兵士達も己の信じる正義のために、愛する者がいる祖国を守るために戦う。その結末が一体なんであろうとも・・・決して彼らは振り向かない、明日、隣に居る隣人が笑うために・・・今、3つの国の4つの勢力は動き出す、その世界に侵食する災厄の権化に踊らされているとも気づかずに・・・

崩れた世界の崩れた町で

身体がバラバラになる感覚がする
同時に、大切な何かが抜けていく

ソレを埋めるように別の何かが入ってきた

身体が再び形を取り戻していく

目の前に一瞬

丸と棒の集合体が見えた

しかし、それはすぐに別のものに变化していく

ここはどこだろう

壊れたビルがいくつもある

焦げた地面が固い

壊れた街には誰もいない

ここはまるで・・・

「危ない！！！」

突然、後ろから

人が覆いかぶさってきた

「うわ！」

そのまま地面に倒れる

「君！こんなところで何してるの？？」

怒鳴るように女性は言った

「す．．すみません．．．あの．．ここは？」

「へ！！？もしかして．．．君迷子！？

アトミツク．．．じゃあないわね．．．」

女性は瓦礫に身を隠しながら云った

「いい？ここは戦場よ

ここから帰れる？．．．．．わけないか．．．」

女性が瓦礫の向こうを覗き込んだ

「あの．．．アナタは？」

「え？あたし？あたしは、エミリー

君は？」

「ボクはラトルです」

「珍しい名前ね．．．伏せて」

小声で云うと銃を取り出した

「いい？合図したら一気に駆け抜けるわよ．．．」

「どこへ．．．行くんですか？」

「ん．．．本拠地までは遠いから．．．とりあえずベースキャン
プに．．．」

静かな時間が流れた

「今よ！」

瓦礫を飛び出し

全力で走っていく

崩れた世界の崩れた町で（後書き）

こんにちわ

Mr. Jです

SFファンの皆様、または、偶然発見された方々へ！

この作品は主人公が「サイバーポッド」と呼ばれる
ロボット機体に乗って戦争を繰り広げる物語です！

万人に読んでいただけるようにがんばります！

この作品は決してガン。ムやそれに類する作品のパクリではありませんので！！

蒼国の夜に全ては始まる

瓦礫の間を走っていく

まわりには、崩れた鉄筋コンクリートのビルしかない

突然、エミリーは足を止めて瓦礫に身を隠した

「いい？あの壊れたビルがベースキャンプだから・・・」

「は・・・はい」

静かに呼吸を整えて周りを見渡す

誰もいないようだ

確認すると

全力でビルに走った

「ふう・・・この奥にあるから
先に行つてて」

「え？エミリーさんは？」

「あたし？」

あたしはこの辺を見回ってくるから・・・」

そっぴい残し

エミリーは走り去った

ビルの中は崩れている瓦礫や壊れたガラスでいっぱいだった

「だれ!？」

少し進むと

突然、銃口が向けられた

「え．．．と．．．エミリーさんに、ここに来るように云われて．．．」

「ユミ姉に？」

瓦礫の隙間から差し込む光が

今、銃口をこちらに向けている主の姿を映し出した

長髪金髪の軽い生地で作られた軍服（あるいは作業着）を着た少女だった

「ユミ姉とどういう関係？」

注意深く聞かれた

「えゝと．．．命の恩人．．．でしょうか．．．」

「．．．」

しばらく、二人の間には静かな時間が流れた

「アトミックじゃあないみたいだから．．．とりあえず入って」

トゲのある口調ではあったが

銃口は下ろされた

瓦礫の山を抜けると

そこには簡単なつくりのテントと

キャンプ道具が整えてあった

「怪我は？」

「え？・・・あ、大丈夫です」

少女はテントを片付け始めた

「ユミ姉が帰ってきたら、本拠地に戻るから・・・片付け手伝って」
「あ、はい・・・！」

少女はなれた手つきで
道具を片付ける

「あの・・・アナタの名前は・・・？」

「自分から名乗るのが礼儀でしょ・・・」

少女は視線をこちらに向けず
手もとめずに云った

「す・・・すみません・・・ラトルです」

「ユミル」

ユミル

それが彼女の名前だろうか？

正直、変わった名前だ

「えと・・・あの・・・どうして<エミリー>さんを<ユミ姉>と呼ぶんですか？」

「本名がエミリー・ユート・ミリアだから・・・」

えらくテンションの低い声だった

否、初めからこんな感じだったのだが・・・

また、しばらく静かな時間が流れた
正直、居辛い

「お！もう片付け終わっただんだ？」

妙に明るく聞こえてくるその声の主が
なにやら、古びた書物を持って入ってきた

エミリーだ

「ユミ姉・・・コイツどうするの？」

口調は若干明るくなっただが
言葉の節々にトゲを感じる

「もちろん本拠地に連れて行くけど？」

「本気で??」

「こんなところに置いてけぼりにするのも可哀そうでしょ？」

エミリーは持ってきた書物を鞆に入れて
支度を始めた

日が傾き

夜が来た

本拠地までは

歩いて8時間かかるらしい

「朝までには着くといいけど・・・」

3人は夜の月明かりを頼りに走った

静かな夜だ

交戦状態になっていない戦場ほど
静かで恐ろしい場所はないだろう
いつ、敵が襲ってくるかわからない

荷物の大半は置いてきたため
それほど重い荷物はない
しかし、その分小物が多いため
カラカラと鳴る

「ひとまず休憩にしましょうか・・・」
それは疲れたから休憩するのではない
目の前に
怪しげな影があるのだ

その影がゆつくりと動く
「あれは・・・？」
「アトミックの偵察機だと思うけど・・・」
「アトミック？」
「あれ・・・知らないの？」

偵察機の動きを気にしながら
エミリーは説明してくれた

アトミックコーポレーション
「原子社」

奴らは、この国<蒼国>を買収し
国を乗っ取ったの
そして、それに対抗して戦っているのが私達・・・
世の中から見れば、私達は反乱軍かな？」

偵察機が赤い目眼をこちらに向けた
瓦礫に隠れているので、見つかることは無い

偵察機が通り過ぎた

しかし、しばらく動かなかった

「もう、いいかな・・・いくわよ」
それを合図に走り出す

突然、銃声が鳴った
足元に火花が散る

「しまった！！！」
振り返ると

あの偵察機が瓦礫から飛び出してきた

ユミルがとっさに対物狙撃銃を取り出す
エミリーもハンドガンを両手に持った
「ラトル君は下がってて！！！」

エミリーが、匍になって
ラトルたちから離れる

「あ、あの！何か他に武器はありませんか？」
「黙って座ってて！！！」

ユミルに怒鳴られて
云われたとうり一応しゃがみこむ

なさない

銃声が夜の戦場に響き渡る

音からして、エミリーの弾は当たっているようだ

ユミルは狙いを定めている

狙撃銃が火を吹いた

弾は目眼カメラに着弾した

視界を失った偵察機がムチャクチャにマシンガンを乱射する
突然

暗闇でもわかる黒い光が現れた

「空乏層？」

今のうちに逃げるわよ！！！」

エミリーが全力で駆け出した

逃げる最中

後ろを振り返ると

黒い光に偵察機が阻まれていた

何時間も走り続けた

不思議と疲れない

「着いたわよ・・・」

見るとそこには、巨大な壁があった

その中央付近には階段があり

小さな穴へと通じていた

すでに朝日が顔をだしていた

蒼国の夜に全ては始まる（後書き）

次回、戦争は激化します

質問等あれば宜しくお願いします

感想もお願いします

失いたくないモノを失った時、愛国者は立ち上がる

「つつ・・・」

「ユミ姉！！血が！」

階段の前に来てようやく気がついた
地面に赤い雫が落ちる

「入ってスグ右に医者がいるから呼んできて！！！」
「は、はい」

ラトルは云われるがままに、階段を駆け出した
そして、入り口に駆け込んだ・・・つもりだった

「うわー！！」

なぜか壁のような物にぶつかった
そのまま、階段を転げ落ちた

「あんた馬鹿！！？なんで通行制限機器ダイオードに突っ込むのよ！！！！？」

ユミルが包帯とガーゼを取り出した

「私が行くから、止血しといて！！！」

ラトルに渡すと

階段を走っていく

入り口の前で立ち止まると

赤かったランプが緑に変わった

それから、数分と経たないうちにユミルが医者らしき人を呼んできた

「腕に弾が残ってるな・・・」

エミリーはゆっくりと階段を登っていく

「私達も中に入るわよ」
エミリーが登りきったのを確認すると
荷物を持って歩き始めた

「あの・・・腕、大丈夫ですか？」
「大丈夫、大丈夫！！」
一時間経たないうちに手術は終わった
腕に包帯が巻いてある
「さて・・・みんなに紹介しないとね・・・」
「え？」

食堂に入る

そこには大勢の人達がいた

「みんなー！ちょっと注目！！！」
全員が振り返る

「この子はラトル君って言うて
しばらく手伝いをしてくれるから！！」

そんな話聞いていない
しかし、そのつもりでいたので問題はない
戦場で助けてもらったのに、タダで帰るわけにはいかない
「よ・・・宜しくお願いします」

丁寧にお辞儀をする

「おう！よろしくな！！！」
タンクトップのオッサンが腕を上げて叫んだ
「ラトル君、あの人がエンジニアのスコーフさん

それで、え〜と・・・そこに座っているのが
偵察隊隊長のミドルさん」

「どうも」

眼鏡をつけた青年が振り向いて軽く頭を下げた
それから、一人一人紹介してもらった
しかし、覚え切れない

「んじゃあ！ここの掃除頼むわ！！」

スコーフが大きな倉庫に案内してくれた

「了解です！」

「お！いい返事だ！！！」

掃除するのは一人ではない
エンジニア総動員で掃除する

床は鉄粉でいっぱいだった

掃除が終ると

なにやら巨大なパーツが運ばれてきた

「な・・・なんですか・・・これは？」

「これか？これは、サイバーポッドの腕だ！！
こいつを取り付ければ

新型機の完成だ！！！」

次に

さらに巨大なパーツが運ばれてきた

夜になると

食堂はお祭り騒ぎだった

とても今戦争をしている風景には見えない

「君か・・・ラトル君は・・・」

上質な服を着た男性が近寄ってくる

「あ・・・はい」

「私はソルイド、この軍の指揮官だ」

「は・・・はじめまして！！！」

「指揮官と総大将でしょ？」

エミリーが後ろから話に入ってきた

「まあ細かい事は気にするな

今後、よろしく頼むよ」

「はい・・・あの・・・いいんでしょうか？」

「ん？」

「もしかしたらボク・・・敵のスパイかもしれないのに・・・」

「あははははは！！！」

その事なら心配しなくていいさ

通行制限機器ダイオードに突っ込んで階段から転げ落ちるような人間が、アト

ミックなわけないからな！！！」

そう云ったのはスコーフだった

「スコーフさん？そんな言い方ないでしょう！？」

「あははは！！すまんすまん！！」

みんなが笑っていた

「そうそう・・・ソルイド・・・あれが完成したぜ・・・テストは

まだだけどな・・・」

「そうか・・・」

イヤに静かな声で話していた

「ここ使っていいからね」

案内されたのは、意外に整えられた部屋だった

「なんでコイツがここにいるの？」

風呂を済ませたユミルが入ってきた

隣に見知らぬ女の子がいる

「いいでしょ？無駄に広いんだから」

どうやら、ここはこの3人の部屋らしい

見知らぬ女の子がこちらを凝視していた

「そういえば紹介してなかったわね

ラトル君

この子はレーン

妹みたいなものだから

よろしくね」

「あ、はい！」

「そつちで寝てね」

ユミルが使われていないベッドを指差した

「は、はい」

「それじゃあ、あたしはまだやることがあるから！

オヤスミ」

「おやすみなさい」

月明かりが差し込むせいか
妙に目がさえる

外に出る

ここは見晴らしがいい
外壁より高い場所にあるので
下界を見渡すと
結構美しいものだ

遠くを見れば
崩れた街が見える

「あそこが首都だったのよ」
エミリーがカップにコーヒーを入れて
隣に立った

「どうして、あんなことに？」

「あれは・・・サイバーポッドが壊したの」

「サイバーポッド？」

「そう・・・倉庫で、巨大な機体が組み上げられていたでしょう？」

「はい・・・」

「あれが、サイバーポッド
人型の機体で

主に拠点破壊が主流なの

サイバーポッド同士で戦うのは効率が悪いから・・・」

「壊して逃げる・・・が基本なんですか？」

「そうそう」

しばらく、時間が流れた

「ごめんね」

「え？」

「なんだかワケのわからない内に戦争に巻き込んだじゃって・・・」

「いえ・・・むしろ感謝しています

あのままあそこにいたら

今頃どうなっていたか・・・」

「・・・」

「・・・」

「もう・・・寝ましょうか・・・」

「は・・・はい」

部屋に入ると

2人の少女が同じベッドで眠っていた

「まだまだ子供ね」

笑いながらそう云った

「目標を確認した・・・」
「もう少し待ってろ」
「時間が無い・・・先に行くぞ」

午前4時
突然爆発音がした
警報が鳴り響く
「なに？」
ユミルが起き上がり
窓の外を見た
「！！！！」
敵襲！！！？」
外壁が壊されて
サイバーポッドが進入していた
「あの機体・・・」
ユミルは部屋を飛び出した

トランジスタ
「増幅機器を用意しろ!!!」

「撃て!!!」

ビーム
電子砲がいくつも線を描いてサイバーポッドに狙いを定める
レーザー
しかし光学放射砲よりもはるかに遅い電子砲は地面を焦がすだけだ
った

手がマシンガンになったサイバーポッドが
城壁付近の施設を破壊していく
幸い

まだ死傷者は少ない

「これ以上被害をだすな!」
ソルイドが指揮をとる

「まさか、通行制限機器を突き抜けるとは・・・」
ダイオード

「あれは、前の機体じゃない!
強化されてる・・・」

「なるほど・・・おい!まだ準備はできないのか!!!?」

「まだ準備中です!!」

「ナパームだけでも使えないのか??」

「弾の補充がすんでいません!!!」

「くそ・・・」

地面を滑りながらサイバーポッドはマシンガンを連射する

「あれはなんですか???」

ラトルが叫ぶように聞いた

「敵のサイバーポッドだ・・・」
すると

ミドルが携帯パソコンを持って近づいてきた

「あれの正体がわかりましたよ

ACS - 117 ガンボーイ2フロンティアです」

「ACS?」

「アトミックコーポレーションサイバーポッド
ACSだ」

ガンボーイと呼ばれるサイバーポッドは
次々に施設を破壊していく

突然、大きな発射音があった
サイバーポッドの腕に小さな穴があいた

「ユミル!!」

エミリーが見る方向にユミルが対物狙撃銃をもっていた
「あの子・・・あんなところに居たら・・・」

エミリーは駆け出した
「まて!エミリー!!」

ソルイドを無視してエミリーが走り出した

「おい!ラトル!!これ運んでくれ!!」

スコーフが大きな大砲のようなものを引きずってきた

「これは!?!」

「トランジスタ
増幅機器だ!

こいつで注意をそらせるんだ!!」

「わかりました!!」

高台の端つこに設置して

小型の電子砲ビームを撃った

すると

トランジスタ
増幅機器を貫通する

しかも、非常に大きな電子砲ビームになっていた

しかし、ガンボーイは簡単に避けた

そこへ、ユミルの一発が機体の中心部に当たる

「この餓鬼・・・」

突然、進路を変えて

ガンボイの小型マシンガンの銃口がユミルに向けられた
ユミルは硬直した

銃口が火を吹いた

ユミルは死を覚悟した

しかし、身体に異常はない
恐る恐る眼をあけた

「！！！！」

朝日が昇り

眼の前に影があった

目がなれていくにつれ

一つの感情が芽生え始める

影がゆつくりと

倒れた

「ユミ姉！！！」

その身体には無数の穴があいていた

「ユミ姉！！！！ユミ姉！！！！！」

「そんな・・・」

ラトルは何もできない自分に嫌気がさした

「次は貴様だ・・・」

別方向から電子砲^{ビーム}が飛んでくる

「ちっ・・・」

ガンボーイは一旦後退する

すぐに医者が、エミリーの側に駆けつけた

「マレーンさん！！！！ユミ姉は！！！」

「・・・」

医者は首を横に振った

「そんな・・・まだ間に合うかもしれな」

「即死だ・・・」

医者はエミリーから離れないユミルを気遣って
危険な前線に残る

「ボクは、またなにもできないのか・・・」

エミリー達と出会ったあの夜も
自分はなにもできなかった

いや・・・まだ何かできるかもしれない・・・

「スコーフさん・・・あの機体ってテストできるように準備してま
したよね・・・」

「あ？ああ・・・」

それを聞いてラトルは走り出した

「まで！！ラトル！！！！おまえ！！！！」

次々に砲台が破壊されていく
あらゆる施設が炎上している

「さあ・・・終わりだ・・・」

再びガンボーイがユミルに振り向く

「一緒にあの世に送ってやるよ」

次に向けられたのは

主砲のマシンガンだった

「ユミル！！立て！」

医者が叫んだが

ユミルは精魂尽きている

「くそっ・・・」

突然、巨大な影が空を飛んだ
そのままガンボイに激突する

「くっ・・・なんだ！！？」

砂煙がたつ

砂煙の中に影が映っていく

カメラ
目眼が赤く光った

失いたくないモノを失った時、愛国者は立ち上がる（後書き）

機体の説明です

ACS - 117 ガンボーイ2フロンティア

ガンボーイを強化したサイバーポッド

両手をマシンガンにしたため、拠点破壊力と装弾数の増加に成功した
ただし、あくまで拠点攻略用なので狙いど通りに弾が飛ぶ事は少ない
ため、対サイバーポッドには向かない

抜れた戦慄は戦場に響く

「くそ・・・」

ガンボーイが壁に激突した

「新手か？」

体制を立て直すと砂煙の中を覗き込むように
目眼カメラを向けた

砂煙の中から灰色の機体が姿を現した

額に< A C S - 0 0 0 >と記されている

「< 0 0 0 > ?」

「スコーフ・・・あれか？」

「ああ・・・」

灰色のサイバーポッドはブースターを全開にして突っ込んだ

「同じ手を通じると思っな」

ガンボーイが左に滑りながら回避する

サイバーポッドは基本的に飛べないのだ

ガンボーイがマシンガンを連射する

しかし、灰色の機体は驚異的なスピードで反転し左へ走った

「おい！誰かラトルと通信つなげ！！」

「つなぎました！！」

スコーフが無線機を受け取る

「おい！聞こえるか？」

「聞こえます！！この機体武器ないんですか??？」

「おちつけおちつけ、いいか?? 武器はねえ！！」

「ええ!!!??？」

「あつたりめーだろ!? まだテスト段階だぞ？」

だが安心しろ

左腕の爪は使えるぞ!!」

「接近戦ですか!!?」

「贅言言つな、あいつは迎撃するだけでいい!!」

「迎撃・・・」

「敵討ちなんて今はかんがえるな！いいな!!」

「・・・はい」

灰色の機体は異常なスピードで突撃する
ガンボイの機動力では捕らえきれない

爪が右腕をかすめた

「ちっ・・・」

赤い目眼カメラが線を描く

突然、何かが外れる音がした

灰色の機体の背部のメインブラスターが落ちた

「「なっ・・・!!」」

「しまった！整備不十分か!!」

「もらった!!」

ガンボーイが前に現れた

「「やられるか!!」」

灰色の機体は地面を蹴って横へ飛んだ
サブブラスターで飛距離を伸ばす

「遅い!!」

ガンボーイの左腕だけが向けられた
無数の弾が着弾する

「「うわああ!!!!」」

灰色の機体が崩れるように壁に当たる

一発の銃声がハッキリと聞こえた
ユミルがガンボーイに傷をつけた

「あ？」

一瞬、ガンボーイの動きが止まる

「「!!!!」」

使えるブースターをフルに使って突っ込んだ
爪が、まともに中心部^{コア}を引き裂いた

「くそ・・・!!」

ガンボイーが後ずさる
そこへ追撃する

「ん・・・」

身体が妙な感覚を感じる
灰色の機体は突然後退した

ガンボイーがこれ幸いと突っ込んで来る
銃口がコックピットに接触した

「終わりだ!!!」

しかし、弾は発射できなかった
ガンボイーの腕を黒い光が包み込む
銃腕の先端は地面に落ちた

「空乏層!!?こんな時に・・・」

ガンボイーは右腕をもぎ取られたまま
来た穴から脱出する

「クロム・・・なさけないなあ・・・」
「目的は達成した」

「だが・・・あの機体はここで討ったほうがいいだろう・・・」

ガンボーイの後ろから別のサイバポッドが現れた

「最悪だ・・・」

「どうした」

ミドルが頭を抱え込むようにうつむいている

「あれは対サイバポッド用の機体ですよ・・・」

「どいつだ？」

「AC S I 0 2 1 スパイラルソード・・・向こうの三大機の一つです」

「まじか??」

「問題・・・ないと思います・・・」

「は？」

スパイラルソードが突っ込んでくる

しかし、穴は黒い光に包まれた

「な！空乏層??」

クロム！！別の穴開ける！！」

「弾切れだ・・・退くぞ」

「ちっ」

2機のサイバポッドは背を向けることなく後退し、去っていった

朝日が真上に昇る

しかし、雰囲気は暗い

あたりはメチャクチャに荒らされている

この襲撃で、17人の命が奪われた

「・・・」

ユミルは持っていた銃を落としてしまう
そのまま地面に崩れる

「おいラトル？そいつはそこに置いといていいから一旦降りて来い」

「はい・・・」

顎の少し下にある扉が開いた

「ご苦労さん！！！」

スコーフが降りてきたラトルに叫んだ

その声が無駄に響き渡る

「お前のおかげで被害は少なかったぞ？あははははは！！！」
しかし、声が出ない

その目線の先でユミルが泣いている

「気持ちまでは変わらなくても、声ぐらいは出せよ？」

「え？」

急にボリウムが変わった

「こういうときは、男が行かないとな！！」

それが世界のお約束・・・だ！！」

ドンツと背中をおされて息がつまった

「は、はい」

無理やりに声を出して駆け出した

「スコーフ・・・」

ソルイドが歩み寄ってくる

「素朴な疑問なんだが・・・なぜ彼がこれを操縦できたんだ？」

「さあな・・・」

「それだけじゃありません」

ミドルがソルイドの隣に立った

「彼は、恐らくーーーーー」

高台の上でユミルがうつむいている

「あの・・・」

「なに？」

即答だった

もはや反射でしゃべっているのだろう

「え」と・・・とりあえず・・・」

言いかけた瞬間

遺体が無いことに気がついた

「あの、エミリーさんは？」

「死んだ・・・見てなかったの・・・」

「いえ・・・身体は？」

「ずっと前に消えたわよ！！当然でしょ！！！」

（遺体が消える・・・？）

しばらく、その疑問が頭から離れなかった

「・・・失った時間は取り戻せるんですよ？」

「は？」

「ですから、失った時間は取り戻せるんです」

「そんなわけ無いでしょう！！！」

「いえ・・・えつとこの場合の時間は思い出つて意味で・・・え」と、忘れなければ永遠にその人は生きてる・・・みたいな・・・？」
漫画やドラマで言っているのはよく聞く台詞だが
実際に言うのは非常に恥ずかしかった
「意味がわからないんだけど・・・」
「えつと・・・つまりですね・・・」
「ま、云おうとすることはわかったから・・・」
立ち上がると、金色の髪が風に流される
「レーンの様子見てくる」
そういつて通り過ぎて行つた
「これで・・・よかったのかな？」
微妙な感じだったが、どうすることもできなかった

夜

亡くなつた17人の葬式が行われた
誰もが涙を流す
それは遺族だけではない
この拠点にいる皆が、お互いのことをよく知っている
この場で涙を見せないのはラトルだけだった
（遺体が消える・・・黒い光・・・）
そんなことを考えている

突然、空から鐘の音が響き渡つた
「なんですか？この音は？」
「ゴールドンベル黄金鐘と呼んでいるんだが・・・」

説明してくれたのはスコーフだった

「この音が鳴る前か、鳴ってる間か、鳴り終わった後かに不思議なことがおこるんだ・・・」

漆黒の空に

鐘の音は響き渡った

抜れた戦慄は戦場に響く（後書き）

だんだんSFっぽくなっていきます

ACS - 000 パトリオット

この作品の主役機

原子社が企画廃棄処分にした機体をソルイド軍が回収し独自の技術で完成させた。

この機体の特徴はスピードとスタミナで
ケミストリー・リバース・システムとギガフリーズにより半永久的に最大火力で機動できるようになった

ACS - 021 スパイラルソード

番号の一番右は戦闘距離をあらわしており

この機体は名前からもわかるように接近型である

また、ヒット&アウェイが基本のサイバーポッドを討ち取るための
対サイバーポッド機体である

紅の火は絶望の闇に光を灯す（前書き）

久々の更新です！

紅の火は絶望の闇に光を灯す

「できたか？」

黒いコートを着た男が整備員に話しかける

「ええ・・・これならACのSPに劣らないでしょう・・・」

「ふむ・・・」

男が機体を見上げた

機体の色はダークブルーだ

「つで？名前は？」

「はい・・・RCS-072アトランティス」

「アトランティス・・・か・・・」

「おかしい・・・」

ラトルは一人、部屋の片隅で考え込んでいる

（あの黒い光・・・変な違和感を感じる・・・）

「ラトル？」

ユミルが部屋の扉を静かに開けて入ってきた

「ソルイドさんが呼んでるけど？」

「え？あ、はい

すぐ行きます」

立ち上がった目の前にユミルの顔があった

「ねえ・・・何か悩んでる？」

「え？いや・・・そんなことは・・・」

「もしかして・・・ユミ姉のこと・・・」

「あ、あの・・・えと・・・その・・・なんていったらいいか・・・」
「と、とりあえず1ソルイドさんが呼んでるから！
それだけ！！」
急にユミルは声を張った
「はい、行つて来ます」
ラトルは慌てて部屋を出た

「来てくれたか」
「はい、ボクを呼んでいると云われたので」
「そうか・・・他の奴は呼んでからかなり時間がたたないと来ないからなあ・・・」
ソルイドが呆れたもので云った
「さて、君に少し頼みたいことがあるのだが」
「なんでしょうか？」
ソルイドは部屋に掛けてある地図を指差した
「この場所」
この場所はよく空房層が出る地域なんだが
実はここには大量のエネルギー物質があるらしい」
「それをとってくるんですか？」
「いや・・・このエネルギー物質を破壊してほしい
しかし、SPではここを破壊するにはいたらない」
「そこでコレを使うんです」
奥の部屋からミドルが出てきた
手に何かの黒い箱を持っている
「これはパトリオットにも取り付ける予定の爆弾です
これを数個用意しています」
コレを手作業でエネルギー物質に取り付け・・・爆破します」

ここはどうやら本当に未知の土地らしい
緑が一面に広がっている

「ラトル君」

「はい？なんでしょう？」

ミドルが銃を手渡した

「ここはアトミックの偵兵機がいくつも通ります
これは護身用です

反動の少ない銃ですので、君でも扱えるはずです」

「あ、はい・・・ありがとうございます」

黒い光がいくつも現れる

ラトルはそれを予知し

スイスイ奥地へと進んだ

その先に紫に光る球体があった

「これですね・・・」

ミドルが爆弾を設置する

「コレでよし・・・さあ、長居は無用です
帰りましょう」

「はい・・・」

振り向いたその瞬間

一発の銃弾が飛んできた

「ラトル君！！伏せて！！」
云われるがままに伏せる

すると、さつき頭があつた場所に銃弾が飛んできた

「スナイパー・・・いや違う・・・この距離で撃ってくるのは・・・
SP!？」

「え!!!？」

あのガンボーイとか云うやつですか!？」

「いえ・・・あれは狙撃なんてできませんよ・・・
あれは・・・ACS-232アクエリアス」

正確な銃弾は次々に飛んでくる

風を切る音が耳に響く

しかし、命中はしない

「どうやら角度的に無理があるようですね・・・」

『ち・・・当たらない』

アクエリアスのパイロットがグチをこぼす

『いいいか？絶対に逃がすなよ』

『ここじゃ無理だ』

『いいいか！絶対に・・・ん？この反応は・・・SPか？』
『何？』

アクエリアスが立ち上がる

「ん？様子が変ですね・・・」

ミドルが小型レーダーを取り出す

「何かがこつちにきます・・・」

「え？応援ですか？」

「いや・・・それならアクエリアスは立たないでしょう・・・」

「じゃあパトリオットを誰かが操縦しているのでは？」

ミドルは首を振った

「いや・アレはまだ整備中です・・・このスピードは・・・多分、コールですね・・・」

「コール？」

「味方ですよ」

『アクエリアス補足！！』

どこまでやっていいんだ？』

『『深追いはしなくていいぞ！』

二人の安全確保が最優先だ！』』

『おっけーい！！いくぜええええ！！！！』

赤い機体がスピードを上げた

『ち！ファイヤストームだ！！』

撤退する！！』

アクエリアスは戦闘モードを終了し

その場から立ち去った

『おいおい！せっかくの復活祝いにそりやないぜ！！』

「ん、なんでですか？あの機体は・・・」

「ああ・・・あれは、まあ・・・対SP用の機体ですよ

赤い機体が近づいてくる

赤い機体のハッチが開き

中から明らかに遊び人といったかんじの男が出てくる

「よーお二人さん！！迎えに来たぜ！」

紅の火は絶望の闇に光を灯す（後書き）

LBS - 059 ファイアストーム2 プロミネンス

反乱軍が作り上げた最初のサイバーポッドの強化版

メイン武器に高火力キャノンを取り付け

サブ武器に中距離キャノン砲を取り付けた対SP用機体である

月明かりに照らされて憎悪は動き出す

「あのヤロー!!」

蒼い戦闘スーツのズボンと黒いTシャツを着た男は壁に殴りつけた

「おちつけ・・・」

「うるさい!」

蒼いスーツはアトミックコーポレーションの戦闘着だ

「あんのヤロー・・・あの穴さえふさがれなければ・・・」

「あのな・・・半壊した俺がキレルならまだしも・・・なんで戦つてすらないおまえがキレルんだよ・・・」

男は缶コーヒ―を飲みながら云った

「それが気に喰わない!!」

俺は目の前の敵は全て倒さないと気がすまないんだよ!!」

「ああ・・・わかったわかった・・・!」

牛乳奢るよ・・・」

男はそういつて自販機に向かった

「クソ・・・」

「ええ!!!?」

ボクがアレを動かすんですか!？」

ラトルは戻ってくるなりソルイドに「パトリオットは君が乗ってくれ」と単刀直入に云われた

「君は試作段階のアレでガンボ―イを退けたのだから

十分な実力があると判断された・・・私の独断でね」

笑いながらソルイドは云った

「そうそう、スコーフが君を呼んでいたよ」

「え・・・あ、はあ・・・」

「おう！来たか！！」

実はな！パトリオットのコックピットをお前に合わせて作りなおしたんだ！

ちよつと乗ってみてくれ！！」

「はあ・・・」

渋々ラトルはコックピットに座った
案外悪くない

「どうだ！？」

「えと・・・いい感じです・・・はい・・・」

「おお！！そりゃよかった！」

スコーフ率いる工作チームは満足そうな声で笑った

「そおおだ！！新しい武装を取り付けたんだ！！
使い方はわかるか？」

「ええ・・・」

見ればパトリオットの腕に銃が取り付けたる
画面には他に2つの装備の現在の状況が出ている

「パトリオットの正式パイロットになったんだって？
同じSP乗りどうし仲良くしようぜ！！」

食堂に入るなりコールが叫んだ

「えと・・・宜しく願います」

「おう！」

「コールはそう云うと別の席へ移動し食事を始めた

「ふうん・・・おめでとう」

「うわぁ!!」

急に後ろから幽霊のような声がした

「なに・・・？」

「え？・・・いや・・・」

後ろに立っていたのはユミルだった

ユミルはお盆に自分の料理を載せていた

「ここ・・・いい？」

「ええ・・・どうぞ・・・」

ユミルが隣に座り

黙々と食事を進める

この日、ユミルとの会話はそれだけだった

『行くぜ・・・』

警報が鳴ったのは深夜だった

ラトルは飛び起きる

「な・・・!」

ユミルも飛び起き、真っ先に窓をのぞいた

ラトルたちの部屋は結構な高さがある

窓を見れば防壁の向こうが見える

「あれは・・・」

外は暗い

月明かりがわずかに大地を照らす

目を凝らしてみればソレが何か、ハッキリとわかった

「・・・スパイラルソード!!!?」

再びSPが攻めてきたのだ

しかし、今回は単独のようだ

「ラトル君!!!起きてますか!!!?」

ミドルが部屋に飛び込んできた

「は、はい!」

「その様子だと目は完全に覚めているようですね
よく聞いてください

今出れるのはパトリオットだけです!」

「え?」

「コールは夕食の酒が回って使い物になりません!

もう一機のSPはまだ整備中です!

今、あの機体を押さえられるのはパトリオットと君だけです!」

「ええー!!!?」

レーザーがいくつも防壁から放たれる

スパイラルソードはそれを無駄な動作なく避ける

「まだか!!!?」

「おいクリス・・・今回の作戦は敵防衛システムの把握だぞ?」

「わかってるよ!!!ちゃんとデータは送ってるだろ!!!?」

防壁のハッチが開く

そこからパトリオットが打ち出された

それと同時に防壁からのレーザーは止まる

『来たか・・・』

スパイラルソードが臨戦態勢にはいった

『さあ、ショータイムだ！！！！』

月明かりに照らされて憎悪は動き出す（後書き）

次回、BOSS戦は

サブタイトルがちょっと違います

く風の殺戮者くスパイラルソード

『待つてたぜ・・・』

パトリオットが地面に着地した

『うわ・・・』

予想以上の振動にラトルは驚いた
前を見れば

スクリーンがスパイラルソードをロックしている

『さあ・・・本気で遊ぼうか!!』

スパイラルソードが砂煙をあげて孤を描きながら突っ込んできた
パトリオットがナナメに機体を傾けて後退する

スパイラルソードと接近戦することだけは避けたい
右手に装備してあるマシンガンを連射する

追尾できないマシンガンの弾はスパイラルソードの側面を飛ぶ
弾がスパイラルソードの後方で地面に着弾し、砂煙の塔を描く

『当たるかよ!!』

スパイラルソードが右腕そのものが剣になっているソレを構えた
リアメインブースターをフラッシュバーストさせた

フラッシュバースト

瞬間的にブースター火力を最大値にして

爆発の威力で移動させること

一気に距離が縮まった

『一発目!!』

剣自体にもサブブースターがある

ソレを使って剣はものすごいスピードで振りかざされた
パトリオットの胸の部分に切り傷がついた

『ぬあ!!』

斬りつけられた衝撃で機体のバランスが崩れた
バランスーが機動して何とかバランスは保てた

『うおおお!!』

バランスーの機能で力学的エネルギーの方向が変わる
その力を利用してステップで左腕に遠心力を加える
左腕の1.5mクローでスパイラルソードを追った
しかし、クローは風を斬った

スパイラルソードは後退して、体制を整えていた

『当たるかよ!!!』

スパイラルソードが再び突っ込んできた
孤を描きながらパトリオットの前に来る
先を読んでマシンガン撃った

しかし、スパイラルソードは飛んだ

『んあバカな!!』

『コイツは飛べるんだよ!!』

飛ぶといってもジャンプだ

そもそもSPは重たいため地上に立っているのが奇跡だ
バランスーでうまく動いているのだ

普段、SPが倉庫に収納されているときはワイヤーなのでつるして
ある

スパイラルソードが地上に垂直に剣を落とした

パトリオットはフロントサブブースターを使って後退した

『な!!』

スパイラルソードの剣が地面の叩き割った

一瞬止まったスキを見逃さず

後退しながらマシンガンを連射した

『ち!!』

スパイラルソードが横に逃げた
しかし、何発かは命中した
機体にキズがついた

運悪く、スパイラルソードの左腕の関節に着弾しており

左腕の機能が鈍くなった

『マシンガン以外に武器は・・・確かあと2つあったような・・・』
ラトルはスクリーンを見渡した

『あった・・・コレ、は・・・』

『ヤロー・・・』

『あんまり熱くなるなよ』

『うるさい!!』

『あーあ・・・(手遅れか・・・)』

おまえ、ちゃんと生きて変えれよ?』

『わかってる!』

『あの子泣かせたら俺がもらうからな』

『うつさい!! 黙ってる』

スパイラルソードの動きが止まった

『・・・』

何かを思いつめたかのように冷静に目でパトリオットを見た

『(お! 作戦成功!! やっぱコイツ女の子に弱いな(笑))』

『はあああ!!』

スパイラルソードがフラッシュバーストで突っ込んできた

『うあ!』

いきなりだったのでラトルは困惑した

右腕が振りがざされた

後退して避けた

しかし、機体はそのまま回転した

そして左腕が襲い掛かってきた

火花がちる

さらに足でブレーキを掛けて反対に回転し

再び左腕が切りかかってくる、そして右腕が追撃してくる

パトリオットの右腕が損傷した

『うわああああ!!!』

衝撃で後退し、そのままのスピードで防御壁に激突した
砂煙が立ち込める

『まだ・・・まだまだ!!!』

パトリオットがフラッシュバーストで起き上がった

マシンガンを連射しながら前進する

『!!!?』

スパイラルソードが慌てて後退する

スピードはスパイラルソードのほうが上だ

パトリオットのスクリーンにマシンガンのロックとは別のロックが
点滅した

『捕らえた・・・!!!』

『ん?』

パトリオットの肩のコンテナのようなパーツが開いた

そこから合計8発のミサイルが飛び出した

そのミサイルがスパイラルソードに降りかかる

『ぬおお!!!』

右へ左へ後退しながら避ける

しかし、避けるたびに動きが鈍る

『なんだ!?!どうした!?!?』

『おおおお!!!!!!』

Gの圧力がかかるが我慢して真っ直ぐにスパイラルソードに接近する

『なんだ!?!?!どうして動かない!?!?』

『終わりだあああ!!!!!!』

2本のクローの間から銃口のようなもの飛び出した

そして、そこから白い大きな翼

否、剣が現れた

その光の剣がスパイラルソードを2つに斬った

『うわあああ!!!!!!』

上半身部分は地面に落ちた衝撃でブースターとエンジンが爆発炎上した

スパイラルソードの下半身はコックピットがむき出しだった

パイロットのヘルメットの頭上をかすめている

パトリオットのマシンガンの銃口がコックピットに向けられた

「ち・・・ここまでか・・・」

しかし、銃口から弾を撃つことはなかった

『!?!?』

『そこまでだ』

高出力のビームが右腕を吹き飛ばした

パトリオットは吹き飛ばされた

『あの機体はたしか・・・アクエリアス・・・!?!?』

『任務終了だ。帰還するぞ』

アクエリアスはパイロットを回収して消えた

紅き夕空に戦乱の幕は音色と共に・・・

ーサイド原始社ー

「あゝ・・・これはアイツかなりやつれてるぞ・・・」

ガンボーイのパイロット アツシュ・グリフオトンは呆れ口調で言った

「大丈夫かな・・・」

その隣でワンピースの女の子が心配そうに立っている

（ま・・・エスナがいれば機嫌も直るだろ・・・）

アツシュは帰還するアクエリアスを確認した

「かえってきたぞー」

ゲート管理の人達が見張りの声を合図にゲートをひらいた

『アツシュ！特定電波通信機器もってこい！！』
トランシーバー

整備員がトランシーバーをアツシュに持たせた

『なんだ？』

アツシュがアクエリアスのパイロットと＜秘密＞の会話を始めた

『正直今コイツかーなり、機嫌悪いんだが』

『はあ・・・エスナいるから大丈夫だろ？・・・少しは・・・』

『いやソレが・・・機体が全壊で・・・』

『あゝ・・・やばいな・・・』

アツシュは頭をかいいた

（どおゝすつかなゝ・・・でもまあこのまま居てもしかたないか）

『降ろせ・・・いつまでもそこに居るわけにはいかないだろ？』

『・・・りょーかい』

アクエリアスのハッチが開いた

「・・・」

明らかに不機嫌なクリスが降りてきた

「クリス！大丈夫？」

エスナがすかさず手に持っていた清潔なタオルを差し出した
「・・・ああ・・・」

クリスは受け取らずに足を進めた

エスナがその後ろを追いかけないように歩いていった

「あゝ・・・エスナもスルーか・・・重症だなコリヤ」

「お疲れ様でした、ウォングさん」

アクエリアスからパイロットのクロム・ウォングが降りてきた
整備員からタオルを受け取る

「中大分あれてるから色々直しておいてくれ」
コックピット

「はい！」

整備員はコックピットの確認を始めた

「なにかあったのか？」

アツシュがウォングに近寄った

「想像はつくだろ・・・」

ウォングがクリスが歩いていった方向を見た

「ああ・・・」

「どうだね、諸君」

「社長！？」

二人の前に若いめがねの男が出てきた

その男は現在アトミックコーポレーション社長アーノルド・フォン・
レビネスだ

「クリス君の機体はそうとうやられたようだね」

「いやあ・・・申し訳ありません」

アツシュが頭を下げた

「いや、気にすることはない

そろそろ全ての機体を新型に改造しよふと思っていたところだ
ガンボーイはすでに強化整備中だ

それが終わったらアクエリアスの強化だ
時代は進んでいるからね

いつまでも古い機体では敵の新型には勝てないだろう」

「敵？・・・レジスタンスへの対応にすればいいんじゃないですか？」

「ふむ・・・どうやら最近紅国と黄国が動いているようですね

我々蒼国も、いつまでも内戦気分ではられないんだよ」

ーサイド紅国ー

「完成しました、ゲインさん」

整備員が男にそう告げた

男は小さな女の子を遵えている

「アトランティス・・・か・・・」

蒼に色づけされた機体を男が見上げた

「ぱぱ？」

小さな女の子は不安そうな声で言った

「大丈夫さ・・・よっ！」

男は自分の愛娘を抱きかかえた

「母さんや・・・みんなを守るために戦うんだ・・・わかるか？」

「・・・うん」

「いい子だ！」

ゲインは再び機体を見あげた

ーサイド黄国ー

荒野の中を機体が走り抜けた

テスト領域をさっそうとかける

テスト用無人戦闘機がマシンガン撃つ

その紅い機体はマシンガンをシールドで防いだ

そして、両手に持ったハンドガンで戦闘機を撃ち落とした

『やるじゃないかロン』

『コレは・・・機体がいいからな!』

ロンと呼ばれた男は陽気に言った

『この新型とおまえが・・・この国の希望だな!』

女王陛下もさぞご満足だろう』

このテストは王宮の女王もモニターで見ている

『ところでさ』

この機体の名前聞いてないんだけど?』

『そうだったか?』

こいつはYCS-062センチネルだ』

『センチネル・・・か、いい名だな!』

ロンは満足そうに言った

『これで俺の出番は少なくなるなあ・・・』

別の男が話しかけてきた

『大丈夫だよ!』

まだまだメテオブレイカーの時代だって!』

ロンはそう云った

そして鮮やかな空を眺めた

(俺は・・・黄国の未来を守りきれのか・・・?)

ーサイド反乱軍ー

「よくやったなボウズ!!お手柄だ!!!」

スコーフが降りてきたラトルに手を伸ばした

「・・・やるじゃん・・・」

ユミルも照れくさそうにほめた

「いやぁ・・・たまたま・・・ですよ・・・」

そう云うとラトルは倒れた

「おい！大丈夫か！！

医療班呼べ！！」

スコーフが慌てて叫んだ

「だ、大丈夫！？」

ユミルも急なことで慌てた

「はは、あんなの初めてだから・・・ちょっと疲れました・・・
ところでスコーフさん」

ラトルがユミルの肩を借りながら聞いた

「あのミサイル・・・なんか特殊な感じが・・・」

「ああ！アレか！！」

スコーフはさっきまでの慌しい感じを吹き飛ばして答えた

「あれは電磁爆ミサイルだ！

爆発と同時に特殊な電磁波で機体の情報処理機能を鈍らせるんだ！

！すごいだろ！？」

「そういうの先に云って下さいよ・・・」

苦笑いを浮かべながらラトルは云った

その場にいた全員が笑った

夕方、空に黄金の音色が響いた
それは何かを暗示するかのよう

ーサイド原始社ー

「・・・・」

「クリス？」

更衣室でクリスは壁に手を着けてその音色を聞いた

ーサイド紅国ー

「黄金の鐘・・・か」

ゲインは自分の胸で眠っている愛娘を強く抱いた

「・・・」

ーサイド黄国ー

『・・・始まりの合図のつもりか？黄金の鐘は・・・』

ロンはセンチネルの中で空を眺めながらつぶやいた

不安を一緒にのせて

ーサイド反乱軍ー

「また・・・この音」

ラトルは天井のガラスから夕空を見上げた

「この音・・・ラトルが来たときにも鳴ってた・・・」

「え？」

ユミルが下を向きながら云った

「この音が鳴る時は・・・いつもなにかが起きる時、なのかもね」

不安そうに云う

「なにかが起きる時・・・」

その言葉を胸に刻むかのように

ラトルは繰り返した

「一体・・・なにかが起こる・・・？」

紅き夕空に戦乱の幕は音色と共に・・・（後書き）

主役機一挙集結（一体は修理中）みたいな感じになりました^^；
あらすじも変更してみました！

とければそちらも見てくださいm（——）m

理想郷を目指して機動兵機は動き出す

「クリス！大丈夫！？」

朝早くにクリスの耳にそんな声が聞こえた

エスナがマユを8の字にして心配そうに言っている

「ああ・・・昨日は悪かったな」

落ち着いた声でクリスは答えた

すると少女の表情は明るくなった

「ううん、いいよ

私、クリスが頑張ってること・・・知ってるから」

少し恥ずかしそうに言った

むろん、クリスも少し恥ずかしかった

少女の頭をかるく撫でて倉庫へ向かった

「やっぱアクエリアスだなあ・・・ガンボーイは無理！」

クロムはコーヒーを飲みながらアッシュに言った

「ふふ・・・結構動かないといけないからな・・・コイツは・・・」

アッシュは強化整備中のガンボーイを見上げながら言った

「アッシュ！おまえ、中の装備でなにがほしい？」

そう唐突に質問してきたのは整備員長のロイだった

「ん？いや、別に今のままでいいが？」

そうだな・・・極上のソファでも取り付けてくれ」

「ははは、残念だったな！社長が居眠るからソファは却下だそうだ」

笑いながら言った

「そうか、それは残念だ」

アッシュも笑いながら言った

「お、今日の主役の登場か！」

ロイは倉庫入り口のクリスは発見した

「ん？」

「喜べ！スパイラルソードの新型がまもなく完成だ！」

「え！？うお！まじ！！」

突然のことに戸惑いながらクリスのはしゃいだ

「ふふ、まだまだ子供だな」

クロムはクスクス笑いながら小声で言った

「まだ17だ

遊び盛りだよ」

アツシュも小声でいった

「さあ！こつちだ」

ロイはクリスを別の倉庫に案内した」

「昨日はよくやってくれたねラトル君」

ソルイドはラトルを会議室によびだしていた

「あ、どうもです」

昨日の疲れもすっかり消えて朝は目覚めがよかった

「さて、今日呼んだのは敵の勢力についてだ」

「え？アトミックコーポレーションじゃあないんですか？」

ソルイドはイスから立ち上がると地図を指差した

「もちろんだ、しかし、サイバーポッドはなにもこの・・・蒼国限定の兵機ではない

ここ・・・ここが我々の今居る場所だ」

ソルイドは地図でそれぞれの場所を指差した

本拠地・AC本社・紅国・黄国

「われわれはレジスタンスと呼ばれている」

「れじすたんす？」

「そうだ、そしてA CのS P部隊・・・コレが<ソルジャー>だ」
「え？A CはS P以外に戦闘兵機を！？」

「ああ・・・他の部隊とちがいA Cは無入兵機を所持している
そして、今当面の問題はここ

紅国のS P部隊<バスターズ>だ

黄国のS P部隊<ガード>は文字どおり防衛部隊だからしばらくは
問題ない」

「バスターズ・・・がどうかしたんですか？」

ラトルは深刻な問題であることを場の空気で察した

「それについては僕が説明しますよ」

ずっとイスに座っていたミドルが立ち上がった

そして、ラトルに資料を見せた

「これは重要機密ですのでお渡しすることはできませんが、見てく
ださい

今まで紅国が所持していたS Pは2機

R C S - 0 3 9 デスサイズ

R C S - 1 0 3 タクティクスです

しかし、奴らはもう一機のS Pを所持したのだそうです」

「あの、このナンバーってなにか意味があるんですか？」

「ええ・・・このナンバーの最初の2ケタは戦闘距離を表しています
もつとも最長なのは23のアクエリアスですね

最後の1ケタは国によって違います
話を戻しますね

この2機、デスサイズとタクティクスは何度もA Cと戦闘を繰り返
しています

つまり、かなりの強敵です、お互いね

そしてこの新型機・・・初陣で投入するとすれば・・・」

「今、最も最弱の・・・ここ？」

「そうです

こちらもパトリオットを除いて2機所持していますが

残念ながら敗北数が上回っています」

「つまりだ」

ソルイドが注目を自分に戻した

「おそらくACはしばらくは攻めて来ないだろう

今、嚴重に警戒しなくてはいけないのは紅国だ

ファイアストームはもう使える（コールに禁酒令を出したのはナイシヨ）

ブラックレイはまだ無理だがな・・・」

「ゲインさん・・・準備ととのいました」

ゲインが黒い戦闘スーツを着ている

その後ろにもう2人男女が立っている

男は戦闘スーツを着ている

「アトランティスの初陣・・・うまく援護してやるよ」

「ああ・・・ま、問題はないだろう」

ゲインは振り返って拳をつくって男の胸にあてた

「頼むぞ」

「ふっ・・・まかせろ」

「気をつけなよ？」

女が声をかけた

「ああ！デスサイズとリオンがついている！大丈夫だ！！」

ゲインはヘルメットを持った手を上にあげた

理想郷を目指して機動兵機は動き出す（後書き）

前回の話でネタバレちっくな誤爆がありました
申し訳ないです

紅国新型兵器の名前は「アトランティス」です
アトランティスでよろしく願います

優しい光は残酷の予兆を語る

『ここは普段、こんなに静かなのか？』

『荒地だ・・・どこも同じようなものだろう』

2機のSPが暗闇の荒野を進む

その後ろを撤退用運搬車両が進んでくる

(ん・・・なんかややこしいことになってるなあ・・・
いつでも出れるように今日ははやめに寝ておこう)

ラトルは外壁より上にある通路を歩いていた

この周辺の拡大地図と世界地図を見ながら歩く

(・・・)

この周辺での戦闘が予想されるため

地理を理解するためにもらったのだが・・・

(これ・・・どうやって作ったんだ？)

衛星など打ち上げたことがないのは明白だった

周辺地図ぐらいなら作れるだろう

しかし、世界地図まであるのは明らかに不自然だ

「・・・考えてもしかたないか！」

「なにがしかたないの？」

「うおおお！！！！！！！！！！」

後ろからテンションの低い声がした

そこにはユミルとレーンがたっていた

レーンはまだラトルになれていないのか、ユミルの腕をつかんで若干後ろにいる

「夜中にこんなところで独り言いつてたら変体に間違われるわよ？」

「す．．．すみません」

部屋は相変わらず素っ気無い感じだ
ホコリなんかのゴミはない

この石の部屋にあるのはベッドが2つ
どこの部屋もこんな感じなのだそうだ

レーンがベッドに入る

するとものの数秒で寝息を立て始める

ユミルは毎晩寝る前に必ず窓から月を見上げる

「月．．．キレイですよね」

「．．．．．うん」

月を見上げるユミルの髪は昼間より輝いて見える

肌もよりいつそう白く輝く

どこか神秘的なオーラだ

その反面、どこか寂しげな感じもする

「月．．．好きなんですか？」

「あんまり好きじゃない．．．でも、キレイでもない」

正直、ラトルはユミルと今まで話した時間でいえば今回が最長だった

「満月の日に．．．私は全部亡くした．．．でも、大切なものも増えた．．．」

もう、半分になっちゃったけど．．．」

ラトルが別の窓をのぞいた

「．．．．．あれは．．．」

『ここか・・・』

ゲインがアトランティスの動きを止めた

『っで？どうする？』

『ふむ・・・ヘタに隠れると逆に見つかった時に不意をつかれかねん
正面から突っ込むぞ』

『了解』

デスサイズが武器を構えた

灰色の機体に灰色の釜

そして、灰色の釜にかすかに光がやどる

刃は、高圧電流だ

数千度にまで上昇した釜は

たいていのものなら焼ききる

『どーしていつも夜中に来るのかなネエ・・・ん？』

外壁の向こうで爆発音がした

『なんだ！！？』

リオンが慌ててスクリーンに注目した

『ふ・・・バレバレ・・・か・・・』

ゲインが余裕たつぷりに答えた

その瞬間、昼間のようにあたりが明るくなった

『ラトル・・・お手柄だぜ！』

『窓からたまたま見えただけですよ』

外壁の入り口に2機のSPがたっている

『あれは・・・ファイアストームとレジスタンスの新型！！』

デスサイズは臨戦態勢にはいった

『援護のつもりが思いつきり主戦力になったな』

ゲインが冗談口調で言った

『 』 』 』 』 行くぞ！！！！！ 』 』 』 』

三日月はきれいな光を放っている

優しい光は残酷の予兆を語る（後書き）

RCS - 034 デスサイズ

対スパイラルソード用に作られた機体

機動力にすぐれ、巨大な高圧電流の釜を装備

他にも肩にサブマシンガン

背中に翼のような砲身のレーザーキャノンを装備している

高圧電流の釜はコックピットを引き裂くと同時にパイロットは感電死する

く死神の鎌は漆黒の闇に溶けるくデスサイズ

『なあラトル』

『なんですか？』

『おまえあつちの新しいやつな

俺はそつちの釜ヤローをつぶす』

『わかりました』

4機のSPの間に数秒間静かな時間がながれた

『行くぞ!!』

先手をとったのはデスサイズだった

ブースターが明るく見える

『きたか!』

コールはにやけながら言った

デスサイズが間合いをつめてパトリオットに切りかかった

パトリオットは後方へ跳んだ

そしてブレーキをかけた

砂煙が上がる

パトリオットは前方へ跳んだ

そしてデスサイズを飛び越えた

『なに!』

デスサイズのカメラが上空を飛ぶパトリオットをおった

パトリオットが地上に着地する

それと同時にデスサイズの右腕に弾が着弾した

『く!』

デスサイズが後退する

『おまえの相手は俺だよ・・・!』

ファイアストームが左肩に装備したマシンガンを連射する

デスサイズは外壁のライトが当たらない場所へ隠れた

『・・・・・・・・』

ライトの外は漆黒の闇だった

灰色の機体すらまったく見えない

『どこだあ？』

笑いながらコールはあたりを見渡した

突然、右手から飛び出してきた

手に持った巨大な釜が今まさに斬り落とそうと迫る

『そこかああ！！！！』

右手のビームライフルが瞬時にデスサイズにむけられなんのためらいもなく放たれた

『ばかな！』

釜をふるい

ビームを弾いた

そして後退する

『前の時とはエライ違いだ・・・』

パトリオットがアトランティスにマシンガン撃つ

しかし、アトランティスはそれを避ける

浮遊型のアトランティスは地面との抵抗がないため

少ないエネルギーで素早く動ける

『さあ・・・お披露目だ！』

左手がパトリオットに向けられた

そして腕の銃口から6発のミサイルが同時に打ち出された

パトリオットを追いかける

次々に地面に着弾する

その衝撃はコックピットに響く

『ぐ……なんて追尾性能だ……!』

アトランティスはパトリオットを中心に円を描く様に動く

『くそ!』

絶えずマシンガンを撃つがカスリもしない

アトランティスの背部が開いた

そこから上にミサイルが飛んだ

『……!!!!!!』

しまった!』

上空で爆発音がした

しばらくして上から鋼鉄の針が落ちてきた

『ぐああああ!!』

パトリオットに突き刺さる

『くそ!……ん? え?……ちょ!』

目の前でアトランティスも針の雨に襲われていた

『しまった……ここまで届くとは……』

アトランティスがフラフラ後退する

『……これでいいのかな……?』

『リオン!しくじった!後退する!』

『は!?』

新型でも勝てなかったのか!!?』

『……詳細は後ほど……』

『は?』

わけがわからなかった

(とりあえず退くか……)

デスサイズが後退する

『おっと!最後にこれを受けてもらわなくちゃな!!』
ファイアストームが脚を固定した

胸部が開いた

『な!』

そこから数秒の間の後

巨大なビームが放たれた

『うわああああ!!!!!!』

そのビームがデスサイズを直撃した

デスサイズの約半分が消滅した

『く・・・ここまでか・・・!』

ファイアストームの右腕のビームライフルの銃口が満足に動けない

デスサイズに向けられた

『ゲイン・・・お別れだ・・・』

『!!!!?』

どうした!?

リオン!!!!』

『なあんてな!!!!!!』

デスサイズの右腕からエネルギーボールが放たれた

それがビームライフルに直撃し、爆発した

その衝撃でファイアストームは後ろへ下がった

『ち!』

無数にエネルギーボールが飛んでくる

それが地面に着弾し砂煙を上げた

砂煙は収まった

しかし、そこにはもう何もなかった

『ちえ1逃げたか・・・帰るぞー』

『す・・・すみません・・・動けないです・・・』

『あ? ったく・・・しゃーねえーなあ』

ファイアストームがパトリオットに近寄った

ファイアストームの足元で何かが引つかかった

そして無様に倒れた

『うおおおおお!!!!!!』

足元に無数の針が突き刺さっていた

そして針の海に倒れる

何本もの針が倒れたファイアストームに突き刺さる

その一本はコックピットを貫いた

『コールさん!!!!!!』

コールさん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

反応がない

ファイアストームはピクリともうごかなかった

く死神の鎌は漆黒の闇に溶けるくデスサイズ（後書き）

一応補足しておく

敵の会話は聞こえませんが

少女の涙は神々の心をも揺るがす

「足元不注意で転倒・・・通信機器破損・・・機体損傷・・・」
ソルイドが呆れて云った

「すみません」

コールは深く頭を下げた

「直す身にもなれってんだよ・・・!」

スコーフも呆れて云った

「まあデスサイズは追い払ったしな・・・処罰はトイレ掃除1週間」

「・・・はい」

コールは大人しくそれに従った

「ふう・・・」

ラトルはベッドに倒れた

「大分戦闘はなれてきたな・・・」

ラトルは前夜のことを思い出して云った

「・・・あの、どうぞ・・・」

「ん？ああ、ありがとうございます」

レーンから差し出されたコーヒーをラトルは笑顔で受け取った
ブラックコーヒーを一口飲んだ

ものすごく苦い

ふと目線を前にむけた

するとレーンが珍しいものを見る目で見つめていた
非常に気まずい

「あの、なにかついてますか？」

笑顔で優しく云ったつもりだったが・・・

「ご、ごめんなさい・・・」

レーンは慌てて部屋を出た

「あ・・・」

しまったと思ったがすでに遅く

支え主を失った扉が閉まった

「なに泣かせてるの？」

再び扉が開くと

そこからユミルが入ってきた

「いえ、泣かせたつもりは・・・」

「レーンは人見知りが激しいから・・・」

正直、激しすぎる気がする

「えと・・・ユミルさんはこの人じゃないですよね？」

「なんで？」

「いえ・・・カン・・・です・・・」

ユミルに睨み付けられた

ラトルはマズイ扉を開いてしまったと思った

「・・・私だけじゃなくて・・・レーンも元々は別のところにいたの・

・」

「別のところ・・・？」

「そう・・・別の戦場に一人でね・・・」

一人で泣いてるところをユミ姉に救われたの・・・」

銃弾が飛び交う

「ユミ姉！！向こうのやつらがそこまで来てる！！」

「了解・・・！」

ユミルが狙撃銃のスコープから目を離した
後ろを振り向くと

壊れた町が目映る

その町からは銃声のみが聞こえる

「ユミル・・・閃光弾ある？」

「うん」

リュックから閃光弾を取り出して手渡した

「行くよ・・・準備して！」

3・・・2・・・1！！！」

閃光弾が投げ込まれ炸裂した

非常に強い光が放たれた

そして、その光にまぎれてガレキを走り出した

「・・・！？」

「どうしたのユミ姉！」

「なんか・・・声が・・・聞こえない？」

耳を澄ますとたしかに泣き声が聞こえた

「ユミル・・・ちよつとスコープ貸して」

「はい」

手早くスコープを外した

「居た・・・」

そう云うとハンドガンを構えて走り出した

「ユミ姉！」

慌てて荷物を置き捨てて狙撃銃を構えた

「はあああ！！！！」

叫びながら少女に飛びついてガレキに隠れていた兵士を撃った

「ぐあああー！」

兵士は断末魔の声を上げて倒れた

遠くでファイアストームが敵SPを撃退した

それを合図にするかのように敵は撤退した

あたりが急に静かになった

少女は小さな声で泣いていた

「どうしたの？」

やさしく声をかける

「お父さんとお母さんは？」

「・・・ここには居ない・・・」

小さく答えた

「はぐれちゃったの？一緒に探してあげようか？」

微笑みなが云う

不安を取り払うためだ

後ろからユミルが走りよってくる

「いない・・・死んじゃったから・・・」

どのように言葉をかけていいのか

言葉に詰まった

「お父さん・・・お母さん・・・視んじゃった・・・死んじゃった・・・」

「」

ポロポロ涙がこぼれた

「死んじゃった・・・」

小さな女の子が死という単語を何度も繰り返した

「・・・大丈夫」

涙を流す少女を抱きしめた

「もう、大丈夫だからね

一人でがんばったね・・・」

「うう・・・うああああああ！！！！」

少女は大きな声で泣いた

何かにすぎるかのように

ユミルはソレを見ていることすらできなかった

「だからね・・・ユミ姉はホントに・・・」

「・・・」

ラトルは言葉に詰まる

なんて声をかければいいのか

最善の言葉が思いつかない

「ここにはね・・・ユミ姉に救われた人がたくさん居るの・・・」

「ボクも・・・その内の一人ですしね・・・」

今は亡き人を愛しく思う気持ち程虚しいものはない

「・・・あれ？なんでこんな話したんだろ？」

ああ！もう！なんかハラタツ！！！」

ユミルは一方的に逆ギレして部屋を出た

「・・・結局なにしに來たんだろ？」

部屋の前でユミルは考えた

「あ」

再び扉を開いた

「さっきのコーヒー、水道に古いオイルが流れてて間違って配ったからってアカネさんが・・・」

「ぶーーーーーーー」

ラトルは飲んでいたコーヒーもといオイルを噴出した

少女の涙は神々の心をも揺るがす（後書き）

微妙な新キャラ登場です

まあ今後「アカネ」は重要なキャラに・・・なるかも

天空を目指す塔

暗い部屋に誰かが入った
足音だけが響く

くアメリカはついに動き出したく

「・・・」

くそうそうに組み上げろく

「あともう少しです」

く期待している・・・く

「はぁ・・・」

「ん？どうした？」

食堂でラトルはため息をついた

ソレをコールがおもしろそうに隣に座って気遣った
「いえ・・・お腹の調子が・・・」

「あゝ変なものでもくつたか!？」

心あたりがあるとすれば先ほどのコーヒーマといオイルだ

「んゝゝゝ多分」

「おいおい!パイロットは身体が資本だぞ？」

医務課行ってこい」

「医務課つてどこですか？」

ラトルは苦笑いをしながら言った

「えゝとゝゝゝドコだったかなゝゝゝ」

「俺がついて行ってやろう」

いきなり図体のデカイ男が声をかけてきた

「おまえがラトルか

俺はステイング、よろしく頼むぞ」

「あ、宜しく願います」

ラトルは丁寧に頭を下げた

「ちょうど医務課に用事があるんでな」

医務課はゲートの近くにあった

外の負傷者を手早く治療するためなのだそうだ

「ふむゝゝゝ胃もたれたね」

Dr・メシスはザラ紙に診断結果を書いた

「ところでメシス

俺の診察表は？」

「あせるなあせるな

ホレ」

Dr・メシスは引き出しから診察表をステイングに手渡した

「かたじけない」

受け取るとステイングは出口へ歩いていった

ラトルが頭を下げてステイングの背中に駆け寄った

「あの、ありがとうございました」
「ん？ああ、気にすることはない」
ステイングは笑顔で答えた

「いやゝ参ったな」

ゲインはアトランティスから降りて腰をついた

「まさかコイツの有効範囲がこんなに広がったとは・・・」

「おいおい、しっかりしろよ？」

リオンが歩み寄ってきた

「中将！」

そう叫んだのは新米の兵士だった

「ん？」

その声にゲインが振り向いた

「中将！なぜテストに中将自らが！？」

「あたりまえだろ？」

ホレ、こんな感じで不慮の事故が置きかねないからな」

ゲインはアトランティスを指指した

「それはおまえが悪いんだろ？」

リオンが即答する

「っで・・・ですから！中将を失いかねないじゃあないですか！！
こういうのは階級の低い・・・」

「階級は命の優先順位じゃないぞ？」

笑っていたゲインが厳しい目で云った

若い二等兵はその目を見て怯んだ

「ま、階級があがれば多少はワガママがいえるからガンバレよ！」
ゲインはそういつて立ち上がった

「しかし！中將ほどの方を不慮の事故で・・・」
皆まで言わずゲインは二等兵の頭に手を乗せた

「次の世代を生きるお前達が生きるために俺達が出るのさ・・・！」
次の時代を進むのはレイス・・・お前達だ」

そういつて軽く頭を叩いてゲインは立ち去った

倉庫には傷ついた2機のサイバーポッドと若い二等兵だけが残った

「『次の時代を進むのはレイス・・・お前達だ』・・・ねえ・・・
ソコ、レイスじゃなくてエミちゃんのことだろ？」

リオンが笑いながら云った

「う・・・」

図星だった

「ま、まあいいじゃないか」

ゲインが笑い飛ばした

更衣室から高い笑い声が響いた

「どうかね？」

「はい！もうまもなくです！」

AC社長は倉庫に来ていた

珍しいことではない

1日の大半を倉庫で過ごしている

「この機体は確実にレジスタンスを撃ち滅ぼせますよ!!」

そこには巨大な塔が聳え立っていた

「ああ・・・この国に秩序をもたらすためだ
がんばってくれたまえ」

そういい残して立ち去った

天空を目指す塔（後書き）

え？蒼国、黄国、紅国ってなんだか信号みたいですって？
その発想・・・あながち間違いじゃあないかもしれないですよ・・・

偉大な少女の一日は鮮麗な夕日に映し出される

「女王陛下・・・ロン大尉がお越しです」

側近が窓の外を眺める女王にそう告げた

「わかりました・・・」

若い女王はイスから腰を上げた

そして側近が綺麗に細工のしてあるドアを開けるのを待つて廊下へ
でる

まだ女王陛下は16歳

先代女王すなわち母親は流行り病により崩御

皇すなわち父親は紅国を訪問中にテロに巻き込まれて他界する

ゆえに、黄国は紅国と仲が悪い

いまだ大きな戦闘が起きていないのが不思議なぐらいだ

それと云うのも紅国の上層部は蒼国にその注意を向けているからだ

黄国は軍ではなく自衛隊

つまり、戦闘を仕掛けるようなことはしない

なので、紅国は黄国に攻め込まないのである

もちろん、紅国は黄国をナメているわけではない

全面戦争になれば大きな損失があることは明白なのだ

女王が広間にある2つの大きなイスの右側に座った

ここは本来国王と女王が座る席だ

しかし、16歳の女王には当然婚約者などいない

広い部屋の扉が開いた

そこから軍服姿のロンが入ってくる

その後ろはアスラ少尉

その右となりにはキュリア軍曹が並んで入ってくる

ロンは女王の前まで来ると片足のヒザをついた

後ろの二人も同じタイミングでヒザをつく

「女王陛下に、この度の模範演習に関する報告をいたします」

そう話始めたのはアスラ少尉

「今日女王陛下こんじつよりお達しがあり、今回の新型防衛兵器「センチネル」

無事、その機動試験も終わり、その性能は確かなモノとなりました」

キュリア軍曹が囁みそうになるのをこらえて云う

キュリアが女王陛下の前に出るのは始めてであった

「ご苦勞様でした」

女王陛下が固い表情で言う

キュリアは固まってしまった

19歳の彼女は年下の女王にひどく緊張していた

予想以上のその威厳に圧倒されてしまう

「以上がこの度の模範演習の報告です」

ロンがなれたようにしゃべる

「皆、よくやってくれました

今後、あなた方の活躍にご期待します」

女王がそう云うと場はしばらくシーンとした

女王が側近に目で合図する

「それでは私は席を外させていただきます」

側近は手をパンパンと鳴らした

すると部屋にいた数名の兵士が退室した

その後を側近が追いかけるように歩く

ロンの近くに行くとか何をささやいた

ソレを聞いてロンは口元が緩みそうになった

ボタンつと扉が閉まった

キュリアが重い空気に潰されそうになる

すると、しばらくしてロンとアスラがクスクス笑い出した

「ふふふ」

アスラが不気味に笑いをこらえる

すると、何かがなくなったようにロンとアスラが笑い出した

「あははは！、ヤレヤレ・・・」

ロンが笑いながら呆れた

「シリス・・・ご期待します は変だよ

そこは期待しますでいいんだよ」

「え、え？」

シリス女王は慌てた

「だ、だって・・・」「ご」を着けると言葉が丁寧になるって・・・」

「あゝ違う違う」

アスラが笑いながら否定する

「「ご」じゃなくて「お」だよ

まあ、使う時と使わない時があるけどね」

3人がチヨー和やかムードでしゃべる

その状況に一番あせっているのはキュリアだ

「あ・・・あの」

「ん？ああ、そうだね紹介しよう

シリス、この人は昨日軍曹に昇格したキュリア・フォスナ軍曹だ」

「え？あ、よ宜しく願います」

「宜しく、キュリアさん」

女王が16歳らしいかわいらしい笑顔で挨拶した

「あ、あの・・・コレはどういう？」

キュリアはその場の全員に状況説明を求めた

先ほどの側近も、この状況にかかわっているのは明白だ

「ああ、ま、最初は皆驚くかな

後で説明するさ」

ロンが笑いながら云う

しばらく、3人の超一般人口調トークショーはキュリアを混乱させた

昼食をとって女王との面会を始めたのだが

すでに夕刻にさしかかっていた

「おっと、もうこんな時間か」

アスラが話しの流れを綺麗に止めた

「では、シリス・・・またね」

ロンが背を向けた

「あ、その、明日も・・・」

「嗚呼・・・来るよ、明日もね

面会理由を考えるのが大変だ」

ロンは笑いながら云った

3人が広間を後にすると女王はイスに倒れるように座った
そして、寂しそうに窓から夕日を見た

「そろそろ、教えていただけますか？」

言葉に怒りが見える

キュリアはすでに一生分のストレスを感じた気分だった

「え？なにが？」

ロンがおどけて云う

「とぼけないでください！

あの状況はなんですか！？」

「あゝはいはい、アレはね

まあいいんじゃない・」

「よくありません！！！！」

ロンは思わず耳をふさいだ

「シリスはまだ子供なのに親を亡くして

さらに国を治めるはめになったんだ

今日君が受けた感覚を、あの子は毎日感じているんだよ」
アスラが真剣な表情で云う

「だから、こうして雰囲気と和ませてるんだよ
これは、側近のエミオさんも同意の上でね
ただ「羽目を外し過ぎないように」とのことだ」

ロンが笑顔で説明する

「そ、それなら最初から云って下さい」

何故かキュリアは赤面した

そこにアスラがキュリアの耳元にささやく

(シリスとロンは・・・)

「おうい！アスラくん？」

何を云ってるのかな？」

「いや、なんでもないさ

では行こうか

まだメテオブレイカーの掃除が終わっていないんでな」

アスラはウィンクしながら云うと

足の速度を上げて立ち去った

偉大な少女の一日は鮮麗な夕日に映し出される（後書き）

悲しいことにこの小説の設定資料を紛失しました
マジでショック！

ちゃんとPCにいれとけばよかった・・・
反省の極みです・・・；w；

分かれた二つの国の二つのストーリー

「クリス、見て見て1こんなにお花が咲いてるよ」

エスナは満面の笑みで話しかける

黄色と白の2種類の花が社内の中庭に咲いている

「ああ」

クリスも笑いながら答える

エスナが楽しそうに笑う

エスナはアトミックコーポレーション本社に監禁に近い状態にある理由は不治の病だからだそうだ

しかし、エスナを見るかぎり具合が悪そうには見えない

監禁という言葉を聴けばキュウクツに思えるかもしれないが

本社は倉庫、市街ともつながっている

用は基本的に自由なのだ

この蒼国の政権を原始社がもっていることに反対するものはレジスタンスに

賛成の者は原子社私設の市街に住んでいる

レジスタンスは反抗軍なので自給自足だが

原子社は正等な国として成立している

ゆえに他国との貿易も盛んで海の向こうの金国、紫国、白国と貿易が行われている

「ねえクリス」

気づけばエスナが顔の前まで迫っていた

「ん？なんだ？」

クリスは笑いながら聞いた

「また、戦場に行っちゃうの？」

「そうだな・・・スパイラルソードが直ったら行かないとな」

それを聞いてエスナは振り返る
背中がやけに寂しそうに見えた

「絶対・・・帰って来るよね？」

「あたりまえだろ？」

「どうしたんだよ？急に」

「こんな会話をするには唐突すぎる

クリスは違和感を覚える

「ううん・・・なんでもないよ・・・」

何かあると云った感じの口調に聞こえる

「エスナ？」

エスナの顔を覗き込む

すると、エスナの目に涙がたまっていた

「エスナ！？どうしたんだよ！！？」

クリスは慌てた

「なん・・・なんでもない・・・」

そう云ってエスナは中庭を飛び出した

まったくわけが解からない

クリスは呆然と立ちすくんでいた

壊れかけた防壁に風が通って音色を奏でる

ガンボーイが開けた穴はその語の空乏層のせいで修復が遅れている

まああそこに空乏層が出現するのならガンボーイが潰さなくとも穴が空いてしまうのではあるが・・・

「今日は満月か・・・」

ふと空を見てユミルがつぶやいた

まだお昼の蒼い空に白い満月が輝いている

「そうですね・・・今日は月見でも・・・」

「そういうことじゃないけど・・・」

ラトルが云うのをユミルが否定するように云った

「満月の日だね・・・超能力者^{マスター}が力をつかえるの・・・」

「ますたー？」

「うん、マスターはその日だけ空乏層を出したり消したりできるの・
・」

「す、すごいですね」

ラトルが関心する

「ユミル姉様・・・！」

そう叫んで（叫んだ声にしては小さい）来たのはレーンだった

「レーンはね、マスターなの」

「そうなんですか！？」

ラトルは素直に驚いた

「そのせいで・・・レーンは殺されそうになったんだけどね・・・」

ユミルは冷たく云うとレーンの手を持って歩き出した

「あ」

レーンが何か云いたげに振り向いた

しかし、すぐに前に振り向いた

分かれた二つの国の二つのストーリー（後書き）

現在の各国の状況です

AC社

スパイラルソード：全壊

ガンボーイ：半壊

アクエリアス：主力戦力外

????：製作中

レジスタンス

パトリオット：半壊

ファイアストーム：自滅

ブラックレイ：整備中

紅国

アトランティス：自滅

デスサイズ：半壊

タクティクス：整備中

黄国（進軍拒否）

センチネル：万全

メテオブレイカー：万全

ジャステイス：万全

つと云うグダダな状態なのでただいま停戦状態です^^；

橋に降り立つ白銀の氷と蒼き正義

『作戦領域に入った』

暗闇に映える白い機体は森の中で動きを止めた

『了解・・・エクス、無理はするなよ』

機体に入った黄色いラインが満月に照らされて輝く

『シルバーダスト、エクス作戦を開始する』

白い機体は森の土を勢い良く蹴りだした

暗い夜の森に轟音が鳴り響いた

「あゝ・・・ねむ・・・」

ロンが背伸びをした

「今日は早めにねるかな・・・」

ロンがベッドに横になる

すると警告音が鳴った

と同時にロンに出陣命令を知らせるランプが光る

「誰だよ・・・」

ロンは入れてあったインスタントコーヒーをいつきに飲んで部屋を出た

倉庫にはすでにアスラともう一人の男がいた

「遅いぞ！、敵はイエローブリッジ大森林を進行中だそうだ」

アスラが叫んで現状を報告した

「大森林を出た先のイエローブリッジで叩く」

もう一人の男がヘルメットを被りながら云う

男は静かに機体へ歩み寄った

『『伝令！敵増援を確認！！
ダーククレアラに敵戦闘機5！
ソーサリーに進行中！』』

「・・・」

男は足を止めて考え込む

「で？どうする？」

ライド少将どの？」

アスラがイタズラっぽく云う

ダーククレアラとはイエローブリッジ大森林の西にある拠点だ

そしてソーサリーとは王都、つまりココである

「・・・ロン、おまえがイエローブリッジへ行け

アスラはダーククレアラで遊撃、全て倒す必要はない

俺がここで残党を叩く」

これは合理的な作戦だ

最も機動力に優れているセンチネルが遠出をしいエローブリッジの
敵を叩く

そして、もっとも攻撃射程距離の広いメテオブレイカーが敵戦闘機
の排除

そして、排除の間に合わなかった残りをジャスティスが叩く

『敵SPを確認！全機、注意しろ！』

リーダー機がそう叫んだ瞬間

光の雨が下から飛んできた

『回避い！！！』

2機の戦闘機がその雨に飲み込まれて空中で爆散した

『クソ！あの機体は無視しろ！

なんとんでもソーサリーにコイツを・・・』

3機の戦闘機がダーククレアラの上空を飛び去ろうとした

真ん中に巨大な戦闘機がある

『あれが主役か・・・！』

アスラが真ん中の戦闘機めがけて光の雨を放った

これはメテオブレイカーにのみある主砲だ

機体の両肩にあるコンテナのような部位から誘導性のない科学特殊弾を打ち出す

どこへ飛ぶかは予想できない

この武器を通称「スターダストレイン」と呼ぶらしい

『隊長！後方から無数の弾が！』

『なんと少しでも持ちこたえろ！！』

『自分が盾になります！』

リーダー機の右を飛んでいた機体が壁になるように軌道を変えた

『隊長！後をたのみます！！』

戦闘機はリーダー機に当たったであろう部分の弾を全て受けた

そして、その場で爆発した

『く・・・！』

仲間の死を無駄にするな！行くぞ！！』

リーダー機が全力で空を切った

『来たか・・・』

ソーサリー正門で蒼い機体が待ち構えていた

『隊長！目前に新たにSPが！！』

『振り切るぞ！目標は目と鼻の先だ！！』

リーダー機の左を飛んでいた戦闘機がジャスティスに弾幕をはる

『・・・！！』

ジャスティスは地を猛スピードで滑り、空中へ飛んだ

そしてマシンガンを戦闘機に浴びせた

戦闘機は墜落し、炎上した

そして、そのままリーダー機の前に出た

『馬鹿な！！サイバーポッドがこの高さまで飛ぶなど．．．．．』

『ジャスティスがリーダー機に至近距離でマシンガン撃った
巨大なリーダー機はそのまま地に着くことなく爆発した』

ジャスティスが着地する

『任務終了だ．．．この戦闘機の所有はAC．．．向こうの機体もACか？』

センチネルがイエローブリッジに到着した

すると同時に橋の向こうの森から白い機体が飛び出してきた

『対応が早いな．．．あれは、黄国の新型か．．．』

白い機体は橋直前で動きを止めた

『あいつは．．．確か、シルバードスト．．．紅国か！』

センチネルが両手に持ったハンドガンを構えた

『敵増援に進行ルートを遮断された．．．これより敵増援の排除を開始する．．．！』

シルバードストが橋に侵入、真正面から突撃する

センチネルがハンドガン撃つ

シルバードストは無数のS字を描きながら前進する

そして、右手に隠してあるソードを展開した

ソードが出ている手にあるアサルトライフルを撃つ

単発撃セミオートのソレをセンチネルに向けて撃つ

センチネルはナナメに機体向けながら斜辺になるように前進した
まるでスキーをしているかのようにシルバードストが前進する

アサルトライフルから飛び出る弾は確実にセンチネルを狙っている
センチネルは橋を飛び降りた

『逃げたか？』

しかし、センチネルは瞬間的に橋から落ちたその反対側から飛び出してきた

しかも、そこはシルバードストの後ろだ

『なに！』

『忘れてないか？ここはコッチのホームグランドだ！』

センチネルがハンドガンを乱射する

シルバードストが振り返りざまにソードを振るった

それがたまたまハンドガンの弾を弾いた

後退する機体をブレイキで止め、フラッシュバーストで前進した

ハンドガンの弾を孤を描いて避ける

そして至近距離にまで接近した

ソードがナナメに振り下ろされた

それはセンチネルは両腕にあるシールドで防いだ

あまりの勢いにセンチネルは後退する

逃がしまいとシルバードストは2撃3撃とソードを振るった

『そこまでだ！』

シルバードスト、コックピット内にロックロン警告ブザーがなった

『ん？』

シルバードストが後退する

そこへ今まさにシルバードストが居た場所に2つの巨大な光の柱が

横から飛んできた

橋の向こう側の側面からメテオブレイカーがスターダストレインを

一点照射したのだ

『これは・・・武が悪いか・・・』

シルバードストがセンチネルの横をフラッシュバーストで越えた

『撤退する・・・が、作戦は実行する』

シルバードストが振り返った

機体の中央にエネルギーが凝縮されていく

そして、橋に向けて巨大な光の弾を放った

それは橋の中央に着弾した

イエローブリッジは砂煙と共に崩れていく
下は漆黒の谷だ

『ロン！！』

センチネルは崩れる橋に飲み込まれていく
『クソ！足を取られた！』

黄色い機体はそのまま谷底へ消えていった

『ロン！！！！』

アスラが叫ぶ

しかし、声は届かない

呆然と立ち尽くすメテオブレイカーの横を蒼い風が駆け抜けた
『ヤツのまわりの橋を砕け！』

ジャステイスが崩れる端に飛び込む

『わ、わかった！』

メテオブレイカーが次々に光の柱で橋を壊していく

ジャステイスが崖の足場で跳ねた

センチネルの手を握ると崖に腕を突っ込んだ

砕かれた橋の粒が降りかかる

ほどなくして2機のSPの動きが止まった

『ヤレヤレ・・・だからキサマは少尉止まりなんだよ』

『す、すまない』

ロンは素直に謝った

橋に降り立つ白銀の氷と蒼き正義（後書き）

ライド少尉は良い人なのか悪い人なのか・・・

醜い陰謀は幼い国を包み始める

「ですねので

今回の件を考慮し

ライド少将の昇格は必然であると思われます」

ニヤニヤした顔で防衛大臣は大会議で発言した

大会議とは幼い女王陛下の後押しと補助を目的として作られた新しい制度である

参加者は女王陛下、十二大臣、そして各部署の最高責任者である部署とはようするにその地方の長である

黄国は地方区分に部署という言葉を使う

例えば、第一部署ソーサリー、第二部署レインゲートなどである

「・・・わかりました・・・」

女王は静かにそういった

その言葉に防衛大臣は口の端を上へと持ち上げた

黄国は一応絶対王政なので女王の言葉は文字どおり絶対である

倉庫では砂まみれになったジャスティスを洗うレイドが居た
ブラシで機体を洗っていく

顔と雰囲気似合わずレイドは何かと几帳面だ

整備員が適当に水ですすいだその後には必ず機体を洗っている

「よー！レイド中将！」

「ん？」

陽気にアスラが歩いてきた
手にコーヒーを持っている
それをレイドに投げた

「おれは少将だ」

「なあんだ？まだ聞いてないのか？

おまえ、中將に昇格だぞ？

なんか急に階級上がってるよなあおまえ」

「（また、アイツか・・・）うらやましいのか？」

「いいあ」

アスラはその言葉を軽く否定した

そして笑顔で話しはじめる

「おれは今のままで十分！

独り身なうえにアパートの家賃もまったく高くないから

給料UPなんて必要なーし」

「あなたの給料はたりてもこっちは足りませんよ」

そんな冷たい声が後ろから聞こえてきた

何故か黒いオーラが見える

後ろを見るとそこには黒いオーラに包まれた光2つの目がアスラを

にらみつけていた

「い・・・」

アスラは後ずさった

そこには怒りにみちたキュリアが立っていた

「どおして・・・どおして拡散型化学弾を5回も使ったんですか！

！？」

キュリアは軍資金管理課長である

「いや・・・それ」たかが5機の戦闘機に5回ってなんですか5回つ

て！！

しかも取り残すなんて！

シルバードストに撃ったそうじゃにですか！！？」

アスラは手を胸の前で壁にして迫り来るキュリアを防ぎながら講義

する

「そ、そうなんだよ！

あそこで撃たなかったら・・・」

「センチネルは半重力電磁滅界の展開中でしたけど!!?」
そのせいでよけいにエネルギーが・・・」

半重力電磁滅界とはセンチネルに装備された電波兵機で
発動にしばし時間はかかるものの発動すれば黒紫の空間があらわれ
その中に存在するセンチネル以外の全てが分子構造を崩される
それにより運が悪ければ原始レベルで分解されるのだ
そうでなくとも鋼鉄物質なら劣化する
生き物なら出血などは優しいほうだ

「いや、そんなの知らな」言い訳は聞きません!!ちょっとコツチ
に来なさい!!」

キュリアはアスラの耳をつかんだ

「イテテテテ!!まてまて!ちょ!レイド!
おまえからも何か云ってくれ」

「ガンバレよ」

「裏切り者おおおおおおおーーーーー!!!!!!」
「!!!!!!」

(・・・)

アスラは倉庫にある別室で一晩中怒られた

重々しい厳重警戒の要塞だ夜の湖を怪しく光らせた
そこにすこし傷んだ機体が入ってくる

「医療班!至急タンカーを用意しろ!」

男がそう叫んだ

シルバードラストはクレーンにつながれたあと

そのまま倉庫に移動された

中から腕から血を流した男が現れた

「く・・・しくじった」

「ちょ！大丈夫！！？」

女が走って寄ってきた

「これが大丈夫に見えるか？」

「ああもう！クールに変なこと云ってんじゃないわよ！」

タンカーが運ばれてくる

「っで？どうしてああなったの？」

数十分後

エクスは腕に包帯を巻いて医療室から出てきた

「さあな・・・まさかタイムラグで敵の増援がくるとはな・・・」

「なるほど・・・それでやられたと・・・」

「いや、これは自滅だ」

「はあ！？」

「最後に撃った電機球を足元に撃ったのがまずかった
あせったからな」

「ぷっ、アンタも焦るんだね

エリートさん」

「・・・タクティクスの準備はできてるのか？」

「万全だよ」

「そうか・・・」

そう云うとエクスは外に出た

「アンナ・・・」

「なんだい？」

呼ばれて外に出る

「行くぞ・・・」

「あいよ」

二人は夜空の下を黙々と歩いた

静寂の夜に悩みは冷たく流される

夜の倉庫には冷たい風が流れ込んでいる

ゲートを開いているのは倉庫内にチリがたまらないようにするためだ
サイバーポッドの回路にチリが着けば誤作動の原因になる

紫の戦闘スーツを着た金髪長髪の男がヘルメットをもって歩いてくる
目前には愛機「RCS-098レクイエム」が立っている

男の名はエッジ・アーノルド

ソルジャーの隊長にして紅国正規軍大將だ

「風がいやに冷たいな……」

吹き込む風の冷たさが肌にささるようだ

「ん？」

こんな時間に出動か？」

ゲインが仮眠室から出てくる

今のこの時間は整備員もいない

「いや、出発は明朝だ

私はいつもレクイエムの中で寝るんでな」

「へえ……」

ゲインは仮眠室に戻り熱いコーヒーを入れ始めた

「飲むか？」

「……いただくか……」

サイバーポッドは前兆役15メートルほどの機械だ

その肩に居るだけでも冷たい風はよりいっそう冷たさを増す

「……シルバーダストが失敗したそうだ……」

「ほう……橋はおとしたんだろ？」

「ああ……しかし、同時に蒼国もからんでいたらしい

つまり、大統領閣下の予想どおり

この戦争の厄介な敵は黄国とレジスタンスだ」

アーノルドはコーヒーをすすった

周りが寒いせいでコーヒーがよりいっそう熱く感じる

「この作戦は黄国の孤立化だが・・・少し検討したほうがよさそう
だ・・・」

「なるほど・・・じゃあドコ攻めるんだ？」

この戦争を終らせるには・・・」

しばらく静かな空気が流れた

「そーだな・・・冷戦に持っていくってのはどうだ？」

陽気な声が後ろからした

アーノルドとゲインは視線だけを後ろに向けた

そこにはリオンが壁に背を任せて立っていた

「無理に占領する必要はないだろ？」

「冷戦か・・・それは平和的な解決にいかないかぎり危険な選択肢
だな」

「つというത്？」

「冷戦は云うならば陣を張ってにらみ合いをしている状態のことだ
しかし、それと違うのはその規模だ

ひとつの小さな陣なら、相手の奇襲のみに警戒すればいい

だが、国規模となるとお互いが戦争にかつたため武力そのものを強化
するだろう

例えば・・・1000Bを超える爆弾の開発・・・とかな」

Bとは武力を現す単位で「バースト」と読む

武器、兵機にはそれぞれ基準があり

ひとつのサイバーポッドまたは戦艦などの兵機は1000Bを越え
てはならないと

国際的に決められている

「1000Bを超える爆弾？」

「この間、その模範プログラムの時点で廃棄処分になった・・・」「核爆弾」・・・

科学的に言えばレジスタンスですら作成可能なのだそうだし・・・もし、冷戦になり

国の上層部の人間がその重圧にたえかねた時・・・おそらくそれは撃たれるだろうな・・・」

コーヒーを飲み干し下におりる

「それに・・・黄国の内部はおかしなことになっているそうだし・・・下手に触ると蛇がでてくる・・・」

やはりエクス達はさがらせるか・・・」

そう云うとアーノルドは通信機をとった

『『はい』』

『アーノルド大将だ

本日明朝に実行予定の全ての作戦を中止する

そちらにあるSPの帰還を伝えてくれ』

『『了解しました』』

通信機をゆっくり置いた

「なんか・・・チキンになってない？アーノルドさん？」

リオンが冗談だという口調でいう

「私は・・・誰よりも命の重さを感じているつもりだし・・・」

「命の重さ？」

「いつもあるようで、一瞬で亡くなる・・・そういうモノなんだよ・・・」

そっくり捨てるとアーノルドは更衣室へ足を進めた

「若いのにしっかりしてらっしゃるねえ・・・」

「っで？おまえは結局何しにきたんだ？」

「ん？ああ・・・デスサイズ・・・直つたらしんだが・・・まだここにはなかったみたいだな」

リオンも倉庫をあとにした

一人、ゲインは倉庫で笑いをおさえていた

「ふふふ・・・まったく、どいつもこいつもSP愛者だな・・・」

静寂の夜に悩みは冷たく流される（後書き）

紅国編の主人公をゲインにするかエクスにするか迷ってます
そしてまだ設定資料はみつからないです・・・^ ^ ;

聖域の剣は地獄の門に突き刺さる

「あの……」

ラトルが控えめにスコーフに話しかけた

「ん？なんだ？」

作業の手をとめてスコーフはラトルの方へ向いた

「ついさつき簡単に計算したんですけど……パトリオットのスペックの計算があわないんですが……？」

「ほお……いつの間にそんな計算ができるようになったんだよ？」

笑いながらスコーフはバンバンとラトルの背中を叩いた

「いえ……ですから簡単に、ですよ

でもかなりの誤差があるんですけど？」

「いやあ、参ったね

そう……こいつにはな……パーツが足りねえんだよ……」

「パーツ……ですか？」

「そう……時期^{ネジ}が、な……」

「ネジ？」

「まあその時期^{ネジ}が見つかるまでは死なないように頼むぜ……！」
再び笑いながらスコーフは作業に戻った

2機のサイバーポッドが森林を抜ける

『いきなり撤退命令……か』

『しかたないでしょ？大将の命令なんだから』

エクスはブツブツ文句を言っている

怪我をしているため、満足に操縦できない

『目標補足』

『さあ・・・復活祭だ・・・!』

静かな森林が騒がしくなった

電子弾が2機目掛けて飛んできた

『エクス!! さがつて!!』

シルバーダストの前にタクティクスが出る

タクティクスは粒子を噴出した

ビームはそれにあたると軌道を変えてソラへ消えていった

ビームが飛び出してきた場所からさらにサバーポッドが飛び出してきた

『くっそ!!』

タクティクスは両手にもったハンドガンで乱射した

『おっと!!』

すかさずスパイラルソードは右へそれた

そして間髪をいれずに前進した

猛スピードでタクティクスに迫る

『なんだコイツ!!?』

こんなに早かったか!!?』

『コイツ・・・武装が・・・!』

よくみればスパイラルソードの装備は若干変わっていた

目にあまる巨大なソードは細くなっており

2つ付いていたサブマシンガンの代わりに刃の間にひとつだけ銃口がついている

それはおそらくアサルトライフルだ

『さあ!! スパラルソード2サンクチュアリの初陣だ!!』

腕を突き出してアサルトライフルでビームを放つ

セミオートなので連射はできない

しかし、今は満足に動けないシルバーダストには十分脅威だ

スパイラルソードに気をとられているスキにまたビームが飛んできた

『クソ！アクエリアスカ！？』

アクエリアスが遠距離から狙撃してくる

アクエリアスのスナイパーライフルは一発は強力だが、次を撃つの
に時間がかかる

『おいしい！！ちゃんと当てるよ！』

『うるさい！木が邪魔でうまく撃てないんだよ！！』

叫びながらアクエリアスが次の狙撃のためにチャージを開始する

『まあいいか！』

俺の独り舞台にしてやるぜ！！』

『（なんでアイツは本社の時と戦闘の時で性格キャラが変わるんだ？）』

スパイラルソードがタクテイクに接近する

接近しながらもビームを撃つ

命中精度はかなり悪い（命中率30％）

なので威嚇程度ではない

しかし、シルバーダストの子守も同時に行っているので脅威である
ことには間違いがない

命中率が悪いということは、ヘタに動けないということなのだ

『くっ！ACはこんなにも早くB装備を搭載してきているのか・・・』

！』

B装備とはビーム兵機のこと、ビーム兵機はダイオードの縮小化
を図らなければ実践向きではない

今、各国で所有しているB装備の機体は一機ずつくらいだ

そう、各国は一機はB装備の機体が存在する

『これが私の力だ！！』

タクテイクスは背中に向いている2つの肩の砲台を前に向けた
空を切るように210度銃口が縦に振り下ろされる

迫り来るスパイラルソードに向けて桃色のビームが放たれた

足元は発射の衝撃で崩れる

轟音と共にビームがスパイラルソードに向かって飛ぶ

『は！！そんなもの・・・当るかよ！！』

スパイラルソードは回転しながら地面を滑ってソレを回避した
『バカな!!』

『くらえええ!!』

流れるように腕の剣がタクティクスを斬る

『きゃああ!!』

そのスピードについていける機体はおそらく今は存在しないだろう
タクティクスは銃装甲だ

まともにその一撃を受けたが、引き裂かれることはなかった
しかし、その一撃は強力で
後ろに飛ばされた

『く・・・ソ』

タクティクスは満足に動けない

銃装甲の機体をスパイラルソードは一撃で打ち倒した

『すげえ・・・スピードだけじゃない・・・パワーも上がってる・・・』

これならあのレジスタンスの新型にも勝てる・・・!』

アクエリアスの狙撃がシルバーダストに放たれた

『く!!』

間一髪で直撃は避けた

しかし、腕がはじけとんだ

『おっと!まだいたんだっけな!』

『おい!』

スパイラルソードはシルバーダストに向きを合わせた

『く・・・』

『ん?・・・なあ!』

狙撃の体制にあるアクエリアスを黒い機体が襲い掛かる

『またせたな!!』

『リオン!』

アクエリアスを蹴り飛ばし

デスサイズ2ヘルズゲートは地に足をつけた

漆黒の機体に巨大な銀の刃のついた鎌がある
背中には可変式ブースタがある

肩には小さな銃口が3つずつ、計6つある
鎌の刃に黄色い光が宿った

『く、こいつもB兵機か』

アクエリアスがさがる

『にがさねえよ!!』

デスサイズがフラッシュバーストで追う

その距離は一瞬で縮まった

『くらえええ!!』

そしかし、鎌はアクエリアスには振り下ろされなかった

黄色い刃にビームが直撃した

反発で機体が左によろけた

『ぬお!!』

『お、当った・・・ラッキー』

『今回は撤退だな』

2機にダメージを追わせたなら十分だろ』

『りようかい』

スパイラルソードとアクエリアスは来た道を全力で走り去った

『ロン・・・助かった、ありがとう』

『いや・・・まあミラクルされちゃあ勝てないか・・・』

デスサイズはゆっくりと立ち上がった

聖域の剣は地獄の門に突き刺さる（後書き）

今回はかーなーり長くなってしまいましたm(_____)m
やっぱり戦闘は一話では抑えにくいですね^^;

今回はリア友に指摘を受けた各国の漢字の読みを紹介します

黄国〓オウコク

紅国〓コウコク

蒼国〓ソウコク

みなさまもご不明な点は感想・評価で気軽に聞いてください^^ノシ

運命の糸はからみつく

「すまねえな・・・」

「いえ、別にかまいませんよ」

「それじゃあ行つてきます」

「行つてきます・・・」

ラトルはゲートで見送りに来た数名の技術班主体の軍勢に手をふったレジスタンスは国ではないため食料などは自給自足だ

しかし、それでは間に合わない部分も多々存在する

そういうときは悩まずさつさと買出しに行くのだ

レジスタンスの本拠地は黄国の近くにあるためいつもここに買出しに行く

しかし、近いといつても軽く20Kmはある

なので乗り物を利用する必要がある

しかし、サイバーポッドを使うわけにはいかない

そこでいつも装甲車両を軽装化したものを使う（今回運転免許は持っていないことは内緒）

荒野は基本的に無法地帯なのでいくら飛ばしてもかまわない

可能最大速度で走れば1時間かからずに黄国領土へ侵入できる

黄国は建国30年ほどしかたっていないため

無法地帯付近での検問はない

なので黄国への侵入は容易だ

そのかわり、町に入るときに武器を所持していないかチェックされるが、買出しに來ただけなのでこれは問題ない

「さて・・・まずは・・・工具」

ラトルが買い物リストを広げていった

B4サイズの紙にメモがビッシリ書いてある

「貸して」

ユミルが紙を受け取るとそれを半分に切った

「こっちお願い」

私達はこっち買ってくるから」

そう云うと車から降りてレーンの手をとった

「行ってきます・・・」

レーンが顔だけ振り向いていった

それに笑顔で手を振って紙をみた

ザッと目を通してわかったことがある

重量級の荷物しか書いていない

やられた

と思ったが、まあ女の子二人に重い荷物を運ばせるのも忍びない

ラトルは地図を見ながらリストの一番上にある工具を買いに車を走らせた

「ついでだからなんかうまいもんでもつまんできなよ」

といってアカネが持たせてくれたお金でユミルはレーンにソフトクリームを買った

「ユミル姉さまは？」

「ん？私はいいよ、他のやつ食べるから」

別に食べるつもりはないがレーンに気を使わせるわけにはいかない
ので軽いウソを言う

キョロキョロとあたりを見渡して雑貨屋を探した

レジスタンス本拠地周辺には黒鉛を掘り出せる炭鉱はもちろん、木
一本すらない

エンピツや紙などの文具も買ってこなければならぬ

「毎度ありー」

重たい工具を地面スレスレの高さでぶら下げてラトルは車につんだ
「ふう〜」

中に入っているのは大量のネジやクギだ
リストの一番上を切り取って丸めた

次は重油だ

ついでに帰り用の燃料も補給しなければならない

「はあ〜ってかなんでこんなにお金あるんだろう？」

疑問を口にしながらラトルは車を走らせた

「んだ？てめえ！！？」

「おう上等だ！！！！オモテにでろ！！」

「ここがオモテだろがバア〜カ！！」

つと、よく聞く喧嘩の声が店のテラスから聞こえた

「え？なにごと？」

ラトルは車を止めた

別にとめたくてとめたのではない

野次馬が道路に集まってきたのだ

男が二人

テラスで殴り合いを始める寸前のようだ

「やめろ」

小さな声が聞こえた

野次馬には聞こえたようだ

しかし、本人2人には聞こえていない

「やめろ！」

しかし、それにかまわず片方が殴った

「ったく・・・」

ラトルの前を青年が通った

後ろから恋人らしき少女もついていく

「いいかげんにしろ！！」

青年が腕をつかんだ

「んだてめえ!!!?」

男は青年に殴りかかろうとした

青年は目つきを変えて男に膝蹴りをいれた

「ぐっほ!!」

男は一撃で倒れた

「な・・・」

もう一人の男が怖気付く

「あの人すご・・・」

両手に袋をもったユミルが車に荷物をつんだ

レーンも一生懸命袋を持っている

「あれ?ここにいたんですか?」

「まあお昼時だからね・・・」

ラトルが再びテラスに目をやった

「つてつめー」

敵味方の区別がなくなつた男は青年にイスを投げつけた

青年はそれを腕で弾きかえした

すかさずまわし蹴りで下顎を吹き飛ばした

男はそのままテーブルに倒れこんで失神した

「きゃーー」

その声に青年は群集に目をむけた

さきほど弾き返したイスが野次馬の上を漂っている

「しま・・・!!!」

慌ててイスにむかつて走り出す

しかし、追いつけるわけがない

「ユミルさん!!!」

「え?」

ユミルはラトルの声にビックリして硬直した

後ろを見れば白いイスが飛んできている

思わず目を閉じた

なにか鈍い音がした

ユミルはゆっくりと目を開けた

目の前をラトルが倒れてくる光景が流れた

ラトルはイスをつかんだまま車に落ちた

そして運悪く工具の袋に頭をぶつけた

「いったー!」

ラトルは叫んだ

そして、失神した

目を開けるとそこは誰かの部屋のようにだ

ソファの上で寝ているのが身体の感触でわかる

オレンジ色のソファからゆっくりと身体を起した

「目がさめたようですね」

青年がホットミルクを差し出した

「あ、どうも」

「すまないね、まさかイスがあんな所に飛んでいくとは・・・」

「いえ・・・それより一緒に女の子を見ませんでしたか？」

「ああ、彼女達なら隣の部屋で女の子3人でゆっくりしているよ3人ということは、おそらく一緒にいた少女といえるのだろう」

手にもったホットミルクを飲んだ

「ボクはラトルといいます」

「ロンだ、よろしく」

運命の系はからみつく(後書き)

ロンの一人称を忘れてしまった今日この頃
一人称をださないようにセリフを考えるのは実に変です^^;

夕暮れの時、別れの言葉となる

夕暮れにさしかかり、ラトル達はロンとシリアに買い物を付き添ってもらった

明日には戻らなければならない

「ふう・・・こんなに買うのか？」

「まあ、そうらしいですよ」

ラトルは重い工具などを装甲車に乗せる

「ふう・・・ところで、今日の宿の予定は？」

「ええと、確かこの町のホテルに泊まるそうですよ」

「もし、よかつたら俺の家にこないか？」

「いいんですか？」

ラトルは車のエンジンを入れながら聞いた

ロンはもちろんと即答した

「これも何かの縁だからね」

「こっちのほうがいいかな・・・」

ユミルとシリアがレーンの服を決めていた

残りの買い物は衣類と食料

食料は明日の朝に市場で買う予定だ

レジスタンスの本拠地付近では魚や塩が取れないのだ

ユミルの携帯電話が鳴った

「もしもし？なに？」

『今日はロンさんのお宅に泊めていただけるそうです』

「りょうかい」

レーンが試着室から出てくる

「ラトル兄さま？」

「うん、今日はロンさんの家に泊めてもらえるんだって」

「それじゃあ私も今日はそちらにお邪魔しますね」

シリアが笑顔で云った

今日は残念ながら満月ではない

しかし、雲ひとつない空に満点の星と月が輝いている

「なんかすみません」

「気にしなくていいよ」

ロンが飲み物をテーブルに置いた

女性は別の部屋で買ってきた衣類で遊んでいるようだ

「ロンさん・・・」

ロンが口を止めさせた

「ロンでいいよ」

「・・・ではロン、キミはここで一人暮らし？」

「ああ、俺は軍人なんだね」

「軍人！？」

「そんなに驚かなくても

こんな時代だ、俺みたいな子供でも戦争に出るさ」

「それじゃあ・・・他国に攻めたりとか？」

「黄国はそんなことしないさ

俺も、この国を守るためにだけにサイバーポッドに乗っている

ああサイバーポッドと云うのは・・・」

「って、そんなこと云っていいの？」

「ん？まあいいんじゃないかな

別に紅国のスパイってわけじゃないだろ？」

ロンは片目をつむってみせた

「え？まあ違いますけど……」

「レジスタンスだもんな」

「いー！ いー！ いー！ いー！ いー！ いー！ いー！ いー！ いー！ いー！」

ラトルは飲みかけのジュースを霧状にして吐き出した

「ゲホッゴホッ……ど、どこでそれを？」

「買い物リストの一番下に書いてあったけど？」

『楽しんできくるレジスタンス』同『つてな』

こえ r はみんなからの配慮だ

しかし、それがアダとなった

「それで？ラトルもSPに乗っているんだろ？」

「え．．．えと．．．まあ一応．．．」

目が泳いでしまう

「なんていう機体？」

「すぐ気になるんだけど？」

「ユ、ユ、ユ。」

「うん、うん。」

「決まってるだろ、討ちたくないから」

⌈
•
•
•
⌋

「じゃあダメか？」

ロンは笑って見せた

しかし、ラトルは表情を崩すことなく断言した

「レジスタンスの敵はA Cだ」

「黄国と戦うことは絶対にない」

「
・
・
・
・
確かに
・
・
・
・
」

「まああえて云うなら、ボクの機体の名前はパトリオット」

「なにそれ？」

「ええ！！？」

「聞かないなあ……レジスタンスの量産型SP？」

てつきりファイアーストームがブラックレイかと……」

「ひどい！それでも活躍したのに！！」

ロンのポケベル（っぽいもの）が鳴った

「おっと」

「え？え？？」

「ゴメン！」

ちよっと思ってくる！すぐ戻ってくるから！！」

「な、なにごと??」

「お仕事

外見ててくれ

俺の機体は黄色いから」

そっぴい残し、ロンは家を飛び出した

「・・・」

ラトルはポケットから紙をとりだした
そしてメモを残す

廊下を歩き、扉をノックした

「はい？」

ユミルが出てくる

「どうしたの？」

「行きましょう」

「へ？」

『『ロン！敵はゲート上空に接近！』』

『了解！迎撃する！！』

倉庫の扉が開いた

センチネルが倉庫から飛び出す

ゲート付近に到着した

すると、足元を一台の装甲車が走り抜けた

『あの車は……』

「あれが……ロンの機体……」

ラトルは聳え立つ黄色い機体に見とれていた

「こら！前みなさい！！」

「す、すみません！！」

ユミルが叫ぶ声にこたえてパツと前を向いた
ゲート上空に5機の戦闘機が現れた

「ラトル！！」

ロンが家に飛んで帰ってきた

「居ない……」

「あ、ロン

おかえりなさい」

「シリア！彼らは？」

「えと……こういうメモが……」

シリアは机にあったメモをロンに渡した

<ありがとう

また、この街で会おう

戦場ではなく、この街で……

ラトル
>

「ぷっ……」

ロンは吹いた

「なんだこの湿っぽいメモ？
まるで永遠の別れチックじゃなか」
以後、ロンはこのメモがツボになったという・・・

夕暮れの際は別れの言葉となる（後書き）

今回の話は非常に書きづらかったです

なので非常に読みづらかったと思います

次回はもっとユカイな話にしようと思います

それにしても今回のオチは無理やりな感じがしますねゝゝゝ；

暗黒の宴は始まりの延声を聞いた

ハリボテに見える防壁にあるゲートを潜る

昨日の夕方に黄国を出たのだが、帰りに帰還中の紅国のSPを発見したため

朝まで身を伏せていた

ユミルとレーンは後ろで積荷と一緒に熟睡している

「ふう・・・」

ラトルは装甲車を倉庫に入れた

まだ朝方なので倉庫の中は非常に静かだ

「おつかれさん」

スコーフが歩み寄ってくる

「予定より早くなりました」

「なあに、予定は未定だ

無事ならそれでいいさ」

スコーフは熱いコーヒーを飲んだ

肌寒い倉庫にコーヒーの香りが漂う

「それじゃあ嬢ちゃん達はそのまま寝かせといて

おまえも休め

荷物は後で俺達が運んどくよ」

「はい、それじゃあおやすみなさい」

ラトルは自室へと戻った

ベッドに倒れこみ、何を考えることもなく眠りについた

「紅国が奇石類の発掘場を崩したそうです」

「ACの発掘場を？あそこには確か町があったはずだ」

ミドルが朝早くから会議室に資料を持ち込んだのだ

レジスタンスの上層部はそれに目を通す

「最近、A C がやけに奇石類を集めていて

その量からしてイージスをしのぐDMを作製しているそうです」

「イージス級の!？」

「それ以上・・・ですよ」

「なら話は早い」

会議室に入ってきたのはステイングだった

「やつらがDMを完成させる前に叩き潰す」

「勝算はあるのか？」

ソルイドが厳しい目でステイングを見た

「ああ・・・イージス以上のDMとなれば回りも気になるだろう？」

「・・・一次停戦・・・及び協定を結ぶ・・・」

「ああ」

ソルイドは目を閉じた

その場に居た全員がソルイドに注目する

「我らが軍師どのの策にかけてみるか・・・」

「ステイング」

ミドルは紙を一枚、ステイングに渡した

「ブラックレイの修理、及び強化終了したそうだ」

「そうか・・・」

ステイングは静かにその場を去った

「さて」

ソルイドが机の一番端に座っている男に振り向いた

「了解・・・」

男は立ち上がり扉を開けた

「どのくらいだ？」

ソルイドが無視を許さない声で云った

「ん・・・話じたいは多分今から1時間ちよい

しかし、向こうのお偉いさん方は固いからなあ・・・

まあでも1週間はかからんだろう」

男はニヤけて云った

そして応答がにのを確認すると部屋を出た

「ミドル、向こうの行動に注意してくれ」

「了解しました」

ミドルは一礼してから部屋を出た

「皆は各自の持ち場を離れるな

各個人の団結なくしてここは守りきれない

デスマシーンはを奴らに持たせるわけにはいかない」

ソルイドは上層部に指示を出す

ほどなくして全員への指示が終った

暗い部屋に男が入ってきた

「形は完成しました」

「どれくらいのチカラを持つ？」

「期待はあまりできかねますね

ま、でもレジスタンスぐらいなら潰せるでしょう」

「決してハメを外しすぎるなよ」

「もちろんです」

男はそう云って部屋を出た

暗黒の宴は始まりの延声を聞いた（後書き）

あきらめました

また1から各SPのメモを作ります

なので早ければ次回から

各SPの個体情報をあとがきに書こうと思います

滅亡しつつあるものこの場において

『イージスを超えるDM?』』

『ええ』

資料庫の外通電話で男が話している

相手は紅国の外務大臣だ

男のとなりでミドルが資料を整理している

『もし、このDMが完成すると

おそらくその猛威はこの大陸全土に及ぶでしょう』

『・・・』

『黄国はすでにこちらの意向に賛成してくださっています
会議は明後日です、良い返事をお待ちしております』

そう云うと男は一方的に電話を切った

『そんな言い回しでいいんですか?』

ミドルが不安そうに聞く

『ああ、全然大丈夫』

男はウィンクすると部屋を後にした

2日後

レジスタンス本拠地に2国の最高権力者がそれぞれ護衛をつけて訪れた

黄国王女は4名の護衛に3機のSP

センチネル、ジャステイス、メテオブレイカー

紅国大統領は6名の護衛に3機のSP

デスサイズ、レクイエム、アポカリプス

レジスタンスは防壁前に全てのSPを配置

パトリオット、ブラックレイ、ファイアストーム

それぞれの代表は本拠地の最上階にある展望会議室に集合した
各SPのパイロットは機体内で待機している

「それでは、現在発覚していることについて説明します」
ミドルは各勢力の代表の前で指示棒を振った
全員がその先端に注目する

「先日、紅国所属部隊バスターズが壊滅させたこの地域
ここからは希土類^{レアアース}が産出されていました。

そして、この希土類は確実にACの新型DMのために使われます
その根拠は、DM1イージスにも、この希土類が利用されているか
らです。

先刻、こちらの潜入部隊が、このDMに関する調査を行ってくれま
した

「これです」

ミドルはホワイトボードに資料を貼り付けた
そこにはぼやけた写真がいくつもある

「この写真から察するに

ACの新型DMの全長はゆうにイージスを超えています」
重々しい言葉でミドルは説明した

「妙ですよ」

そう云ったのは黄国女王だった

「何が、妙なのですか？」

ソルイドが厳しい目つきで女王を見た

「ACは・・・今は蒼国そのものだといっても過言ではありません
そして、その蒼国には今、レジスタンスと云う厄の種が存在します。
なのに、ACはレジスタンスの排除に専念しないばかりか

他国にまで敵意をむき出しにしています
そして、今回のこの機体・・・私達は、彼らの罠にかかっている
のでは？」

「それはどういうことか？」

紅国大統領はわけがわからなかった

それは皆が同じだった

ちなみに、この会議の内容は各SPと本拠地内全てに筒抜けである

「私達は、いえ、私達を一度に殲滅するために決定打を撃たずに
今日まで戦争を長引かせた
こんにち

そして、各国が新たな水準でSPを作った

センチネル、パトリオット、アポカリプス

各国の持てる全てが出た頃合を見計らって

今回のこの騒動になったのではないか・・・と、思います」

文はメチャクチャだった

幼い女王には少々この空気は重すぎたのだろう

しかし、云っていることの全てに筋が通っている

「・・・ところで」

紅国大統領が話しの方向を変えた

「その新型DMには、名前はついていないのか？」

「ありますよ、ただ、ふざけた名前です」

ここを見てください、これがこの機体の名前です」

指差された写真の文字はカスれている

ミドルはホワイトボードにその文字を写した

<DM2ディストラクションゲーム>

滅亡しつつあるものこの場において（後書き）

今回の小説は一回書いてエラーがでて消滅したので
内容が若干薄いです

朝日に立つ塔は明日への希望を拒む

ACが所有するもつとも巨大な倉庫

ここでは、DM2の機動テストが行われていた

「よし！」

これで、今日の夕方にはレジスタンスは消滅している！」

「妙だ・・・」

ラトルはパトリオットに備えられている固定遠距離映写機を眺めていた

「なにが妙なんだ？」

ステイングがブラックレイの中でパンを食べていた
ステイングはパトリオットの向いている方向を見る

「ね！ACのSP！！？」

「あれ・・・30分前から居るんですが・・・」

「どうして云わなかった！？」

「妙なんですよ」

「妙？攻めてこないのか？」

「いえ、あのSP部隊・・・武装がないんです」

「??？」

見れば、確かに敵の量産型SPには武装がない

「・・・ラトル、あれは武器なんて甘いものじゃない」

ブラックレイが空へ向かって空砲を撃った

「おでました！！！！」

「なんだ？」

紅国大統領は背中から聞こえた轟音の方向へ向いた
みれば、肉眼でハッキリわかるほどの数の量産型SPが前進してき
ていた

「な！」

「きたか・・・総員警備体制に入れ！」

ソルイドがマイクに向かって叫んだ

「女王陛下！はやくこちらへ！」

「いえ、私はここに居ます」

「陛下！もし、陛下に万が一のことがあったら・・・」

「安心してください」

ここが一番安全ですよ。

西ゲート閉鎖！

7番8番のトランジスタ用意！

17番18番レーザーダイオード用意！

北・東ゲートより黄国SP機紅国SP機回収後西ゲートより射出！！
依存はありませんね？御ふた方？」

「ああ、かまわん」

「メテオブレイカーは後方支援型ですので西側の高台への誘導をお
願います」

「わかりました

ミドル！全てのSPの回線を開く準備を！

まだ各国家SPの機体としか連携が取れない状態だ
急げ！」

「はい！」

『ロン、出陣後おまえは左へ回ってくれ
敵が突っ込んでくるつもりなら挟み撃ちにする
ジャステイスとセンチネルの機動性なら敵の退路を防げる』
『了解！！』

『俺とファイアストーム様はゲート前で射撃だ！』
『こつちもだ、ブラックレイも中距離型なんでな、すまん』
『わかりました！』
スコーフさん！パトリオットの第一リミッターは外してもいいんですよね？』
『つてかもう使ったことあるだろうが！』
構わん！！思いつきりやってやれ！！』

『デスサイズとレクイエムなら敵を追いまわせる
そこで俺が一斉に火の雨を降らせる
混乱する敵さんを切り刻め！』
『はいはい、期待してますよおゝ軍師さん』
『了解だ』

パトリオットが大群に突っ込んだ
敵の前線はブラックレイとファイアストームの射撃で吹き飛ばされる
『数撃ちやあたる状態だな』
パトリオットが敵の大群に突っ込んだ頃
メテオブレイカーが高台に登った
『ほほお、あの灰色の機体はセンチネル並の機動性だな
友軍だから当てないようにしないとな』

メテオブレイカーが一筋の光を放った

それが合図になったかのようにセンチネル・レクイエム・ジャステイス・デスサイズ・アポカリプスがゲートから飛び出した

『暴れるぜええええ！！！！』

デスサイズが地面を滑りながら大群の左に突っ込んだ

その後ろからセンチネルが追い抜いた

センチネルは大群に牽制をかけながら後方へ回る

『あれが黄国の將軍機……こちらの實力、今ハッキリと見せてやる』

レクイエムが大群の右から突っ込んだ

それと同時に回転しながらブレードで3機のSPを撃破した

『ほう、そうとう気合入ってるな』

ジャステイスが後方へ回り込んだ

一瞬、センチネルと目が合った

そして、合図でも送ったかのように二機は同時に大群へ射撃した

『クソ！敵が後ろに！！』

『前線は何をやっている！！？』

敵のSPの反応は遅い

『さあ……ショータイムだ！』

アポカリプスは上空に無数の拡散弾を撃った

それが孤を描いて大群の中心部に落ちる

中心で大きな炎のドームが描かれた

一機、また一機と確実に敵を破壊していく

しかし、その流れは一筋の光の柱により止まった

『よける！！』

その光の柱は地面を抉りながらレジスタンス本拠地の外壁に命中した
かなりの遠距離から撃たれたので、パワーは落ちていた
それでも、外壁は無残な姿になっている

『なるほど・・・あれが・・・』

まだ朝の日が完全に昇っていない

その日をバックにして一本の巨大な塔が立っていた

パトリオットはその塔に向きを合わせた

『あれが・・・DM2ディストラクションゲーム』

神の盾に許された絶対封魔の光

『あんなものが・・・！』

ゲインは苦笑する

『あれの迎撃を最優先にしろ！』

アーノルドがアトランティス・デスサイズに指示を出す

レクイエムは量産型SPの大群の中心を割るように進んだ
アトランティスが持ち場を離れた

『おいおい！あの青い奴、後方型のくせに前出るのかよ！』

コールは叫んだ

『おちつけ！』

紅国の大統領はまだ中だ

見捨てて逃げるようなことはしないだろう』

ステイングは必死に敵を撃破していく

『ボクも行きます！ここはお任せします！』

『了解だ！』

『あいつらはあのDMの撃破に向かったようだ
俺たちでこいつらを片付ける！』

『わかった！』

ジャステイスを先頭に黄国のSPがもはや残党と言っても過言では
ない

量産型SPに立ち向かう

『センチネルでアノ光の柱防げないか？』

『んなもん無理だ！！！！』

「通信が使えないというだけで、ここまで連携が取れないなんて」
黄国王女は展望台から戦場を見ていた
他の2名はイスに座っている

各SPは十分に戦果を出している
しかし、上から見れば、その連携はメチャクチャだ

「どうやらディストラクションゲームはあの光の柱を撃つのに時間を有するようですね」

ソルイドは資料を見ながら言った

「あんなもの、連射されては困る」

紅国大統領は笑いながら言った

「使っしかないか・・・」

「何をですか？」

「・・・王女殿下、あなたはACが我々を放置していると言った
しかし、それは少し違います

<これ>の真の力をお見せします」

「？」

「王女様はまだお若いですからね
確か、レジスタンスが使ったのは・・・」

「20年前です

ミドル！パトリオットに伝えて

何としても全員を下がらせろ！」

「はい！」

ミドルが通信機に飛びつく

『ラトル君！聞こえますか！？』
『はい？』

思わずラトルは声が裏返った

『『いいですか？』』

今からかなりキツイのを使いますから

下がってください！

それで、一緒に向かっている3機にもそれを伝えてください！！！！』』

『ええ！！！？無理ですよ！！』』

『『よろしくおねがいします』』

『え、ちょー！』』

ミドルに一方的に回線を切られた

『ええい！くそ！！』』

パトリオットは突っ込む3機の前にマシンガンを撃つ

『なんだ！？』』

3機が足を止めた

パトリオットは次に防壁に向かって撃つ

防壁にタマがあたって火花が散る

そして、パトリオットは後退した

『なんだ？あいつ』』

デスサイズは再びDMに突っ込もうとした

しかし、ジャスティスがそれをさえぎった

『あれは、おそらく下がれということだ』』

『本当に？』』

『今は敵対している場合ではない』』

『ま、將軍様の命令ってなら下がるかな』』

3機は撤退する

「よし」

ソルイドが立ち上がった

部屋の片隅にあるボードにパスワードを入力する

「下がっているか、何かにつかまっていってください」
ソルイドが最後のキーワード打った

轟音とともにレジスタンスの本拠地が動き出した

『うわぁ！！なんだ！！？』

ラトルは慌てる

確実に動かないだろと思っていた本拠地が浮上しはじめたのだ

『ああ・・・ラトルは知らないわな』

『いいかボウズこれはな』

世界で最初にして最大のデスマシーンだ』

『ええ！！！？』

民家は収納されていく

そのうち、ひとつの鋼の山のような形になった

そして、防壁はすべて外側に倒れ回転する

数十秒で、ひとつの円盤型飛行物体が出現した

それは、DM1イージス

この世で最大級の防衛兵器だ

「ミドル、総員に伝える

各自持ち場につき、ゴーゴンを発射する」

山の頂上が青白く光る

それは玉の形を作り上げ、光球はまっすぐ塔へ飛んだ

塔は、まともにその一撃を受けて崩れ去った

「あつけない終結だったな

できればイージスは使いたくなかった・・・」

ソルイドが勝利を確信した

しかし、それはすぐに撤回されることになう

『御機嫌ようレジスタンス、紅国、黄国の皆様

今、ゴランいただいたDM2ディストラクションゲームの試作機は
いかがだったでしょうか？

次はありません

皆様が降伏してくださるなら、完成品を使う必要がなくなります
私は無駄な戦いは避けたい

皆様の最も知的な返答をおまちしております』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2393c/>

B L O O D L I N E T E M P E S T

2010年10月28日07時23分発行